非核平和都市品川宣言 40 周年記念

2024　品川区平和使節

派遣レポート

Shinagawa City
品川区

※英文訳は巻末の発行者欄

非核平和都市品川宣言

今、この地球に、
人類は自らを滅ぼして余りある核兵器を蓄えた。
いまだかつて、開発された兵器で使われなかったものはない。
これは、歴史の恐るべき証明である。

一刻も早く、核兵器をなくさなければならない。
頭上に核の閃光がひらめく前に。
遅すぎたとき、それを悔やむだけの未来すら、
我われには残されていない。

品川区は、核兵器廃絶と恒久平和確立の悲願を込めて、
ここに非核平和都市を宣言し、全世界に訴える。
我われは、いかなる国であれ、いかなる理由であれ、
核兵器の製造、配備、持込みを認めない。
持てる国は、即時に核兵器を捨てよと。

このかけがえのない美しい地球と、
そこに住む生きとし生けるものを、守り伝えるために。

昭和 60 年 3 月 26 日
品川区

「シンボルマーク」
※平和の象徴であるハトが爆弾をくわえていってしまうことを表しており、ハトには品川の文字をデザイン化しています。

はじめに

品川区では、核兵器の廃絶と恒久平和の確立を願い、昭和 60 年 3 月 26 日に、区民の総意のもとに「非核平和都市品川宣言」を行いました。

この宣言の趣旨を一人でも多くの方々に理解していただき、戦争の悲惨さや平和の大切さについて一緒に考えていくため、品川区では様々な事業に取り組んでまいりました。

本紙における、広島・長崎への平和使節派遣事業は、宣言の趣旨を次世代に語り継いでいくことを目的として、昭和 62 年から実施していた「青少年広島の旅」を引き継ぎ、平成 15 年度から始めたものです。「品川区平和使節」として位置づけ、本年で 22 回目を迎えました。

広島平和使節派遣には品川区立中学校 8 年生 15 名、長崎平和使節派遣には一般公募の青少年 6 名が参加しました。また平和に関するパネル展示や区内のイベントに「折り鶴コーナー」を設け、たくさんの方のご協力をいただき千羽鶴を作成しました。平和使節派遣生はそれぞれの鶴にこめられた「平和」への願いを胸に、区民の代表として広島・長崎へ捧げました。

広島の派遣生はそれぞれの学校の文化祭や報告会などにおいて、派遣生一人ひとりが知恵を絞り、友達や保護者、地域の方々に一生懸命平和への想いを伝えました。

この「派遣レポート」には、現地に行った派遣生が感じ、学んだ貴重な経験が報告されています。今回の経験を通して、平和の尊さ、大切さに対する認識を深め、その「想い」が学校や職場、地域社会に広がり、あらためて平和について考えるきっかけになれば幸いです。

末筆ではありますが、本事業の実施にあたりご協力いただきました講師の岡本忠様、木原　省治様、寺本　真理子様、半田　修三様、広島市、広島県原爆被害者団体協議会、長崎ピースボランティアのみなさま、黒板　美由紀様、長崎市、公益財団法人長崎平和推進協会、澤原　義明様、指田　和様、平和の願いを込めて千羽鶴を折っていただいた皆さまほか、関係者の皆さまに心から御礼申し上げます。

令和 7 年 3 月

品川区

目　次

はじめに …… 1

第１部　中学生広島平和使節派遣
1. 行動日程表 …… 3
2. 広島での主な活動 …… 5
3. 感想文 …… 8
4. 被爆者講話 …… 21
5. 碑めぐり講話 …… 36
6. 成果報告 …… 37

第２部　青少年長崎平和使節派遣
1. 行動日程表 …… 45
2. 長崎での主な活動
（1）被爆体験講話 …… 47
（2）室内学習と資料館周辺のフィールドワーク …… 48
（3）平和祈念式典 …… 49
（4）平和学習（意見交換会） …… 50
（5）長崎原爆資料館見学 …… 51
（6）碑めぐり …… 52
3. 感想文 …… 53
4. 派遣をふり返って …… 61

第３部　資料編
1. 広島
（1）広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式次第 …… 63
（2）平和宣言 …… 65
（3）平和への誓い …… 67
2. 長崎
（1）長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典 …… 68
（2）長崎平和宣言 …… 69
（3）平和への誓い …… 71

第１部
中学生広島平和使節派遣

●派遣生

（A グループ）

東海中学校　：神河　英里
大崎中学校　：小橋　優菜
荏原第一中学校：水野　優一
戸越台中学校　：小林　詩子
品川学園　：藤村　和

（B グループ）

浜川中学校　：下鶴　栞
鈴ヶ森中学校　：和氣　芽佳
荏原第六中学校：池田　耀
八潮学園　：石　弥羽
荏原平塚学園　：礒邉　悠斗

（C グループ）

冨士見台中学校：中山　優月
荏原第五中学校：東　かや乃
日野学園　：青木　隆之介
伊藤学園　：林　沙良
豊葉の杜学園　：佐野　瑞樹

●引率者

八潮学園副校長　：菅野　秀一
品川学園教諭　：正田　芙沙子
荏原平塚学園教諭　：八坂　弘
区長室総務課　：平地　亜樹

（敬称略）

1．行動日程表

令和６年度 中学生広島平和使節派遣　令和6年8月5日～7日（2泊3日）

8月5日（月）

時　　間	行　動　内　容	場　　所
8：45	集合・出発式	JR品川駅
9：19～13：02	新幹線乗車（品川駅～広島駅）	
14：00～15：30	被爆者講話	広島ＹＭＣＡ国際文化センター
16：20～17：30	原爆ドーム・平和記念公園等 見学	平和記念公園等
18：30～19：30	夕食	リバーズガーデン
20：00	ホテル着・一日のまとめ	ANAクラウンプラザホテル広島
22：00	就寝	

8月6日（火）

時　　間	行　動　内　容	場　　所
6：00	集合・朝食	ANAクラウンプラザホテル広島
8：00～9：00	平和記念式典参列	平和記念公園
9：40～11：40	平和学習（被爆者2世講話、これまでの振り返り、灯ろう作成）	広島ＹＭＣＡ国際文化センター
12：00～12：50	昼食	お好み村
13：00～13：40	袋町小学校平和資料館見学	袋町小学校平和資料館
14：00～16：10	平和記念資料館・国立広島原爆死没者追悼平和祈念館見学	広島平和記念資料館、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館
18：30～19：30	夕食	リバーズガーデン
19：50～20：15	灯ろう流し見学	元安川
20：30	ホテル着・一日のまとめ	ANAクラウンプラザホテル広島
22：00	就寝	

8月7日（水）

時　　間	行　動　内　容	場　　所
7：00	集合・朝食	ANAクラウンプラザホテル広島
9：00～10：45	碑めぐり講話	平和記念公園
12：00～12：50	お土産購入	広島駅
13：18～17：08	新幹線乗車（広島駅～品川駅）	
17：15	解散式・解散	JR品川駅

◎事前学習会・事後報告会

第１回事前学習会　６月24日（月）

派遣生が派遣の目的を理解し、より高い意識を持って、派遣に臨めるよう学習しました。
（広島・長崎派遣合同で実施）

（1）派遣生自己紹介
（2）非核平和都市品川宣言事業について
（3）平和使節派遣事業について
（4）事前学習
（5）次回までの課題について
（6）派遣日程や生活面・健康管理について

第２回事前学習会　７月25日（木）

各グループが第1回目の事前学習会で決めたテーマについてグループで発表・意見交換を行い、各グループでまとめ、全体へ発表しました。

（1）グループ学習

《グループテーマ》

Aグループ
「被爆前後の生活様式の変化」

Bグループ
「当時の人々の思い」

Cグループ
「被害の詳細やどのように復興したかを知る」

（2）「派遣のしおり」内容確認
（3）派遣の諸注意事項について

事後報告会　８月21日（水）

各グループで決めたテーマについて学んできたこと、今回の平和使節派遣で各派遣生が学んだことを1グループずつ発表しました。
また今回の平和使節派遣の成果を、3月に行われる非核平和都市品川宣言40周年記念式典で発表するために、各自の役割を決めました。
（広島・長崎派遣合同で実施）

（1）発表準備
（2）派遣の成果発表
（3）40周年記念式典での役割決め

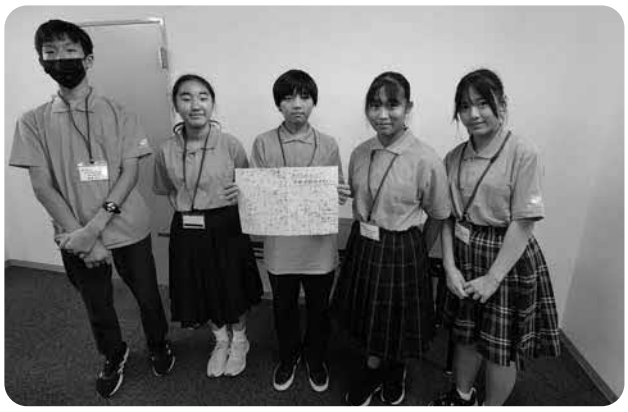
2. 広島での主な活動

1日目（8月5日）

・品川駅から出発
・被爆者講話
・平和記念公園、原爆ドーム見学
・千羽鶴を捧げる

２日目（8月6日）

・平和記念式典参列
・平和学習（被爆２世講話、グループワーク、灯ろうづくり等）
・昼食（広島名物お好み焼き）
・平和記念資料館、原爆死没者追悼祈念館見学
・灯ろう流し見学



3日目（8月7日）

・碑めぐり講話
・品川駅にて解散

3. 感想文

「平和とは何ですか？」

東海中学校　神河　英里

私は、広島派遣に行く前と行ったあとでこの問いに対する答え方が大きく変わった。行く前は、他人事として「誰も武力で傷つけられない世界」と考えていた。

新幹線で隣の人とおしゃべりしながら広島に着く。広島駅周辺は路面電車が走っていること以外は東京とほとんど同じ風景だった。ここで、79 年前に人類で初めて原爆が落とされたとはとても想像ができない、どこにでもありそうなごく普通の街並みだった。

一見、どこにでもありそうな都市に見える広島。そこで私の考えが大きく変わった場面は 2 つある。

1 つ目は、初日の被爆者の方の講話だ。お話ししてくださった被爆者の方自身は、当時幼かったため当時の記憶はないが、お母さんや叔母さんの記録をもとに話してくださった。その話で語られたものは、文章では表せないほど悲惨なものだった。原爆が落ちた時にガラスの欠片が飛んできてできた手の傷。父方の妹に援助を求めたものの断られてしまい、その後の壮絶な生活。広島としては復興しても、手の傷や被爆したというだけでお嫁さんを迎える時や就職する時などに苦労した話。後遺症で今も苦しまれている方の話。その一つ一つに、原爆が奪っていったものが現れていた。そして、それは今も残り続けている。それを目の当たりにした私は、戦争というものを初めて自分事として考えることができた。

2 つ目は、原爆資料館で見た被爆当時私とほぼ同い年の子供たちを集めた企画展だ。数分前までは当たり前のように一緒に友達と談笑していたのに。ほんの少し前まで一緒に作業していたのに。数日前まで、ともに学んでいたのに。そんな当たり前だと思われていたことが、一瞬にして奪われていった様子を読んで、言葉を失う。自分のことだと想像してみた。普段の学校生活や家族との日常などが突然にして奪われてしまったら。数分前まで一緒に話していた友達が突然瓦礫に吹き飛ばされていたら。想像するだけで恐ろしい世界だと私は思った。このように日常生活を送れることが平和だということに気がついた。

その平和の大切さを伝えるには、各個人が持つ認識の違いなどの多くのハードルがある。しかし、平和記念式典でこども代表の子が言っていた「平和は祈るだけでは訪れない」という言葉の通り、今回学んだことを伝えないと意味がない。今、日本で送っている生活こそが平和であり、それは当たり前ではないこと。実際に 79 年前、一瞬にして当たり前を奪われ、その後もずっと大変な思いをしている人がいること。幸い、今の社会は個人からも情報が発信できる。それも活かしながら、本当の平和とは何かを今後、私はより多くの人に考えてもらえるようにしていきたいと思う。

広島派遣に参加しての感想

大崎中学校　小橋　優菜

「願うだけでは平和は訪れません」。これは、8 月 6 日に行われた平和記念式典での、こども代表の言葉です。私は現地でこのこども代表の

スピーチを聞いていました。まだ小学六年生で、堂々と語っている姿に心を打たれました。それと同時に、原爆が投下された時に、まだ今の小学生くらいだった人もたくさん亡くなっていった、ということを実感することができました。私は小学三年生の国語の教科書で「ちいちゃんのかげおくり」を読んでから、戦争に興味をもち、戦争に関する小説を何冊か読みました。しかし、広島の原爆について詳しく記述されている小説は読んだことがありませんでした。それに加えて、戦争に関する話を読んでも、“戦争は怖いもの”“戦争は恐ろしいもの”といった内容の記述が多く、私自身もその印象しかもっていなかったように思います。しかし、今回広島に行き、被爆者の方々のお話を聞いたり、式典に参加したり、資料館を見たり、実際に戦争の爪痕を見たりして、少しずつ自分ごととして捉えることができたと思います。特に被爆者のお話で、「今世界には、ボタン一つで発射することができる核兵器がたくさんある」「核兵器は人間にとって最悪の爆弾。地球にあってはならないものだ」という言葉がとても印象に残っています。いつ核兵器が使われてもおかしくない状況で、それを自分ごととして捉えなくてはならないと強く実感することができました。また、平和記念資料館で、たくさんの被爆者の遺品を見たり、その当時の様子が書かれている文章を読んだりして、さらに“本当に広島に原爆が投下された”ということを強く実感することができました。私はこの広島派遣で改めて感じたことがあります。それは、原爆は恐ろしく、2度と同じ過ちを繰り返してはならないということです。そして、妹との軽い口喧嘩や、友達との喧嘩だけで最悪だ、と言っている自分がだんだん情けなく思えてきました。ただの喧嘩なんて可愛いものだと思いました。それを実感する大きなきっかけとなったのは、資料館でたくさんの遺品、絵や写真を見たことだと思います。ホラー映画の小道具の展示を見ているかのような酷いものばかりでした。白黒でしか見ることができないような写真もありました。このたくさんの資料を見て、絶対に核爆弾は使ってはならないと思いました。もう、2度とあの資料館の人たちのように苦しむ人が出てはいけないと強く実感しました。それとともに、核爆弾以外の、新しくできたAIを利用した爆弾のようなものも、無くさなければ平和は訪れないと思いました。私は、将来何か物語を作ることに関わる仕事をしたいと思っています。もしこの夢が叶ったのなら「この広島であったことを忘れない」「二度と繰り返させない」という想いを、この広島派遣で感じたことを活かして、次の世代へと伝えていきたいと考えています。

広島派遣に参加して

浜川中学校　下鶴　栞

私はこの夏休みに広島派遣に参加して、戦争の悲惨さや平和の尊さについて学びました。

1日目は実際に被爆された方に講話をしていただきました。その方は今もなお左腕に傷跡が残っており、その傷は生きている限り消えないものだとおっしゃっていました。この方以外にも、今でも身体に傷が残ってしまっていたり放射線の後遺症により苦しんでいたりする方がいらっしゃいます。それを聞き、「戦争は昔話ではない」ということを実感しました。私たちは広島で起こったこの悲劇を多くの人に伝えていかなければならないと強く思いました。

2日目は広島記念式典に参加し、首相や広島市長、こども代表の話を聞きました。その話の中には79年前の広島と今の広島を比べての話

が多くあり、私たちが当たり前に過ごしている日常がどれほど平和で尊いものなのか身に染みて感じると同時に、平和とは何かを自分自身で深く考えることができました。夜は灯篭流しの見学を行いました。日本からだけでなく、国外からも多くの人々が灯篭にメッセージを書いている姿が見られ驚きました。海外の方たちは

「外国で起こった一つの戦争」ではなく「広島で起こった悲惨な出来事」という意識を持っていたからです。広島に原爆が落とされたいうことは国内外問わず、全ての人々が知る必要があるのだと改めて認識しました。

3日目の碑めぐりではガイドをしてくださった寺本さんの「私たちは微力だけれど無力じゃない」という言葉がとても心に残っています。私は自分にできることは少ないのではないか、学んだことをしっかりと活かせられるのか心配でした。ですがこの言葉を聞き、自分ができることは小さいかもしれないけれど、ゼロではないのだと思うことができ、更に学びを深め平和の意思を繋げていこうと思いました。

今回の広島派遣では自分の目で見て自分の耳で聞くことを大切にしながら戦争や原爆、核兵器の悲惨さや恐ろしさを学ぶことができました。原爆資料館で見た傷だらけの服やボロボロに壊れている三輪車、当時の様子が描かれた絵は地獄のようで思わず目を背けたくなるようなものばかりでした。ですがそのようなものにも向き合うことが多くの人に伝える上で大切なのだと思います。私もどんなことにも目を背けず、次に伝えていけるようにこれからも学んでいきたいです。また、三日間で多くのことを学び平和への実感が湧きました。学校に行き得意なことも苦手なことも学習し、身につける。休み時間は友達と談笑する。それがどんなに尊く幸せなことなのか、普段の生活だけでは理解することは難しいのだと思います。

私がこの三日間で学んだこと、感じたこと、家族や友人、学校のみんなにできるだけ多くのことを伝えたり、戦争に関する取り組みに参加するなどして、平和な世界を実現させたいです。

「広島で学んだこと」

鈴ケ森中学校　和氣　芽佳

「私が広島平和使節派遣に参加を希望した理由は、テレビや教科書からの知識だけではなく、実際に広島へ行って自分の目で戦争について学びたいと考えたからです。また、戦争を起こさないためにはどうしたらいいのか、自分に何ができるのか、戦争を他人事ではなく自分事として考えるきっかけにしたいと思ったからです。そして実際に広島へ行き、たくさん学んだことがありました。その中で、特に心に残っている二つの事があります。

みなさん、戦争は昔に起こった悲しい出来事、そう思っていませんか。私が一つ目に学んだことは、戦争は昔ではないということです。私は、「今、日本で戦争は起こっていないし平和だ」「戦争は昔に起こった悲しい出来事だ」と思っていました。しかし被爆者の岡本さんの話を聞き、戦後も戦争によって家族を亡くし悲しんでいる人、原爆の後遺症に苦しんでいる人が、まだたくさんいることを知りました。そして、まだ戦争は完全に終わっていないということを学べました。戦争や原爆によって大切な命が何百万個も奪われたのです。それは二度とあってはならないことです。しかし世界ではまだ戦争が続いているのが現実です。「もう絶対に戦争は起こしてはいけない」被爆者の方の話を聞き、その思いが一層強くなりました。

二つ目に学んだことは、今の私たちにもでき

ることはあるということです。私たちは戦争を体験しているわけでも、親が戦争を体験しているわけでもないので、私たちにできることなんてないと思っていました。正直、できることがあるなんて思ったこともありませんでした。でも、被爆者の岡本さん、被爆者二世の澤原さんのお話を聞き、私たちにもできることはあると分かりました。「私たちは微力だけれど無力ではありません。」この言葉を碑めぐり講話をしてくださった寺本さんが最後に教えてくれました。具体的に私にできることは、身近な人に今回聞いたこと、感じたことを話し、平和への意志を広げることと、どんな相手をも理解しようとすることの２点だと考えました。このことを世界中へ広めていけば、戦争は二度と起こらないと思いました。他にも学んだことはたくさんあります。それらのことも含め、将来、平和な世界を実現するために、今自分にできることをしっかりと行っていきたいです。

事前に学びたい、知りたいと思っていたことは、広島での様々な体験を通して少し分かったような気がします。また、戦争について詳しく学べ、どれだけ辛いものかを知ることができました。今回聞いたこと、見たこと、感じたこと、体験したことを積極的に身近な人に伝えていこうと思います。そして、この先戦争が起こらないために、私は平和についてもっともっと考え続けていきたいです。

「原爆は昔話じゃない」

冨士見台中学校　中山　優月

「原爆は昔話じゃない。」

一日目に講話をしてくださった岡本忠さんは言いました。岡本さんの講話を聞いてから、自分の戦争や原爆への考え方ががらりと変わりました。今までは、戦争や原爆は自分には無縁のことで、終わったことなのだから関係ないという考えが自分の中でどこかにあったと思います。しかし、実際に広島を訪れ、原爆ドームや資料館に行くと、自分が想像していたものよりはるかに残酷で悲しい現実がありました。

想像してみてください。自分自身が 2000 度以上の灼熱の中、水もなく熱の影響で皮膚も垂れ落ちてきて、助けもこない。周りを見渡せば、家族や友人も亡くなったり、大きな怪我をしたりしている。そんな状況でどう生き延び、その先どう暮らしますか。私ならもう耐えられなくてどうすることもできないと思います。当時そのような状況に陥った人が 14 万人以上もいます。そして、原爆を生き延びたとしても、放射線の影響で病気になるリスクが高まります。原爆の被害はその時だけで終わるものではないのです。

私は広島派遣に参加して、非常に様々なことを学びました。特にその被害の大きさには、最も驚かされました。自分では想像もできない規模での被害。被爆者は、被爆者だからといって差別されたり結婚ができなかったりと、その後の人生にも大きな影響をもたらしました。そして多くの人が被害を受けたことを知り、小さなことでもいいから自分には何ができるのか真剣に考えました。そこで一番初めに浮かんだのは、平和記念式典での子供代表の言葉です。「願うだけでは平和は訪れない。平和を作っていくのは、今を生きている私たちなのではないか。人の話を聞いたり、広島で感じたことや考えたことを周りの人に伝えたりしていく。こうすることで少しずつ平和ができていくのだ。」という言葉がとても印象に残っています。子供代表が、自分の考えを大きな声で自信を持って伝えている姿を見て、誰もが心を強く打たれたことでしょう。

私は総理大臣の政治的な言葉より、子供代表の感情がしっかりとこもった言葉が心に響きました。そして私も、自分の考えたことや広島に行って感じたことを多くの人に伝え、少しでもこれから先の平和に貢献していきたいと強く感じました。そして、子供代表が自分の考えをしっかりと持っていたように、私も自分の考え方を言葉に表すことができるよう、もっと広島や長崎で起きた戦争、原爆のことについて深く知っていきたいです。また、私が子供代表の言葉で広島についての考えが深まったように、私の言葉で、原爆で被害のあった方に貢献できるよう、努力してみたいと思える人がもっと増えるよう頑張りたいです。

思いから伝え繋がっていく世界

荏原第一中学校　水野　優一

原爆投下から79年の時が過ぎ、それの悲惨さを伝える者たちが時代とともに少なくなり、人々の記憶が薄れつつあるこの時代に私は「中学生広島平和使節派遣」に参加した。戦争というものを体験することなく生まれ、生きる人が増えたことは確かに喜ばしいことだ。しかし、このことは戦争に対する世間の認識の低下にも繋がってしまうことは事実ある。

冒頭の「79年」という数字をあなたはどう感じたであろうか。長い、短い、実感がわかない　etc.　私はこの79年いう数字を、長く感じ、なにか遠い存在だと認識していた。これまでは。

今回の派遣を通じ、現地で人と実際に関わることで私にもいくつの変化が起きた。様々なものを見て、聞いて、触れて、味わい、嗅ぎ、五感を駆使して思考し、この身に刻んだ。

全3日間の初日、私たちは被爆者の講話を聴いた。その方の話では何回も以下の言葉が強調されて登場した。「伝える」この言葉の奥深くには、今日、自分が体験したことを忘れないで、友達や家族、そして未来へと伝えていってほしいというメッセージが含まれていた。2日目では多くの記念館や資料館を巡った。私は、なぜ多くの労力を費やし、過去のおぞましい記録を一般人にも見える形で展示しているのか考えた。考えたのち、これも未来へと「伝える」ためであると悟った。この3日間やその前後でも自分の意見を発表する機会が多数設けられた。やはりこれも自分から「伝える」ためであったのかと今思う。

「伝える」ためにはいったいどうすればいいのか、何から始めればいいのか。そう悩んでいた私にある一言が道を示してくれた。「得意なことやできることでも平和を伝えることができる」この言葉は考えすぎて動かなくなっていた私の身体を動かすきっかけとなった。いきなり大きな組織に対しての活動や団体に所属したりなど、今の自分には一歩踏み出しづらい方法でも平和を伝えることは可能だ。だが、「得意なこと、できること」なら今の自分や、私と同じような境遇の人でも実践に移せるであろう。今、私は吹奏楽部で楽器を演奏している。これまでは特に強い思いを持って演奏をしていなかった。だがこの派遣を通して、今自分の手の中にある楽器でも平和を伝えることができると考えると、うれしさや意欲が高まった。そして今では平和について「伝える音色」という思いを持って演奏している。

いきなり一個人から世界を大きく変え、平和を実現することは今の自分や世の中では非常に難しい。ほぼ不可能だ。だからこそ自分の「得意なこと、できること」から平和について考え、伝えていくことで、やがて個人が集まり団体になり、団体が集まり組織になり、組織が集まり

国になり、国が集まり世界へと伝え繋がっていくのではないかと私は考える。小さなことだから、成果が体感しづらいから。と諦めるのではなく、まずは「平和」について思い、考えてほしい。こういった積み重ねがやがて世界を平和へと導くと私は考える。

広島平和使節派遣に参加して

荏原第五中学校　東　かや乃

広島に行く前、平和について深く考えることはあまりなかったです。そして、戦争・原爆は遠い過去に終わっていると思っていました。しかし、被爆者の講話や、碑めぐりの講話を聴いて戦争・原爆は今もまだ終わっていなくて、苦しんでいる人もいることを知りました。同時に「平和とはどんなことだろう」と考えるきっかけになりました。私は、「ありがとう」や、「ごめんね」などを素直に言ったり、相手の話をしっかり聞くことで、小さなことでも大きな平和へと繋がるのではないかと考えます。

被爆者の講話は、今当たり前にできていることはとても幸せなことで感謝しなければならないことだと教えてくれました。友人と何気ない会話、家族と笑い合うこと、ご飯を食べれること、今生きていること、当たり前なことが急になくなってしまうことは本当に悲しいことだと思いました。

被爆者の方が、言っていた「原爆のことをただ伝えるのではなく、自分が被爆者になったと想像してバトンを次の世代に繋げていってほしい」という言葉が印象に残りました。また、次の世代に伝える責任感を強く感じました。今年、被爆者の方の平均年齢が 85 歳になり、実際にあったことを伝える方が少なくなっています。そんな中、被爆者の方のお話を直接聴くことができた私が伝えたことを、皆さんも周りの人や、次の世代に伝えてほしいと思います。原爆はたった一発の攻撃で大勢の人々が亡くなり、多くの方が今も後遺症などで苦しんでいます。私たちはその人たちの後遺症などを治せるわけではありません。ですが、戦争･原爆のことを知って、つなげることはできると思います。私がこう思った理由は平和記念式典で小学生が平和について強く語っているのをみて、平和の考え方が変わったからです。式典にはさまざまな国の方が参加していて原爆がどれだけ大きなことなのかを改めて知らされました。

平和記念資料館では多くの写真や動画があり戦争・原爆は、すごく最近のことなんだと実感しました。黒い雨の斑点がついた洋服やリュック、血がついている枕など、被爆当時を想像させるものがたくさんありました。また、ある少女は 2 歳で被爆し、小学 6 年生で白血病と診断されだんだんと体が弱くなっていき、亡くなりました。自分や、自分の友達だったらと想像するととても辛くなります。被爆者の中には自分の国に帰れずに被爆した朝鮮人の方々がいることを忘れてはいけないです。戦時中労働不足を補うために強制連行などで多くの朝鮮人が日本で働かされ、数万人が被爆したと言われています。世の中には日本は強制労働などをしていないと言い張る人もいます。私はしっかりと向き合い、それをずっと伝えていくべきだと思います。

原爆は残酷で忘れてはならないものだということ、平和とは当たり前にできることを感謝すること、また小さなことが平和の輪を大きく広げることを次の世代に繋げていきたいです。

憎しみだけでは先に進めない

荏原第六中学校　池田　耀

僕が広島平和使節派遣に参加した理由は、戦争を体験した人達の本当の気持ちを知りたかったからです。僕の曽祖父は、戦争でウズベキスタンに捕虜として抑留され、ひどい生活を送っていました。寒い環境で過酷な労働をさせられ、ろくに食べ物も与えられず、カエルなどを捕まえて食べるような生活でした。日本に帰ってきて50年ほど経ってから、再びウズベキスタンへ行き、抑留されていた嫌な思い出の場所に、桜を植えました。桜を見て喜んでくれたウズベキスタンの人達と交流し、帰国した後、母に「戦争は嫌いだけど、ウズベキスタンの人たちは嫌いじゃない」と話したそうです。敵だった国の人を嫌いじゃないと言った曽祖父の言葉の意味や気持ちを知りたくて、僕はヒロシマに行きました。

僕が一番心に残った話は一日目の岡本忠さんの被爆者講話です。その中で二つの言葉が印象に残りました。一つ目は「原爆は昔のことじゃない！」ということです。この言葉は原爆が落とされたのは昔のことだけど、原爆の問題は終わっていないということです。原子爆弾は今もなお強力になり、数も増え続け、世界には1万2000発もの原爆がボタン一つで爆破できてしまう状況にあります。だから岡本さんは、「原爆は昔のことじゃない！」と言ったのだと思います。二つ目は、「憎しみは何も生まない」という言葉です。この言葉は岡本さんだけではなく、お話を聞いた全ての方が言っていました。これは憎しみを持っていても何も生まれないし、平和のために自分たちが何かしていかなければならないという意味もあると思います。この言葉を聞いて、僕はヒロシマに行って知りたかったことがわかりました。曽祖父の言葉「戦争は嫌いだけど、ウズベキスタンの人達は嫌いじゃない」は、人を憎んでも何も生まれないとわかっていたので、この言葉を言ったのだと思いました。曽祖父は桜を植えることで、平和のために自分がやれることをやったのだと思います。

1945年8月6日8時15分ごろに落とされたヒロシマの原爆で約14万人の方が亡くなっています。原爆が落とされた直後一瞬で周辺は焼け野原になり、いたるところで炎が上がり、人は原形なんてとどめておらず、人かどうかもわからない状況で、水に飛びこんだが、肌が青や紫に変色し、体が膨らんでしまっていたとのことでした。

僕はヒロシマに行って、原爆について3日間学び、戦争の恐ろしさと原爆の悲惨さを知りました。しかし、原爆がヒロシマに落とされた日から、79年が経っていて、お話をしてくれた方のほとんどは、当時は1歳などの子どもで、親や友人から聞いた話を伝えてくれました。原爆のことを「覚えていて」「伝えてほしい」と言っていました。いつか実際に原爆を経験した方がいない時代が来ます。その時、二度と同じような悲惨なことが起こらないように、僕がやれることをやらなければならないと思いました。それは「身近な人にしっかりと原爆が落ちて何が起こったのかを伝える」ということ。そして「原爆だけは戦争の手段として使うのは絶対にダメ！！と伝える」ということ。僕が平和のためにやれることをやりたいと思います。

原爆

戸越台中学校　小林　詩子

路面電車の窓から見えた景色。私は、目を疑った。「この場所に本当に原爆が投下されたのだ

ろうか」。それは、東京と同じように多くの建物があり、多くの人が行き交っていたからだろう。とても、79年前に原爆が落とされ、街が焼けた場所とは想像もできなかった。きっと、79年前も、普段と変わらず、忙しい毎日があった。もちろん、第二次世界大戦中だ。だから、子供も大人も、食べ物が少ない、着るものがないなどの自由が奪われていたのだろう。だが、自由のない中でも、資料館や本などには、楽しそうに遊んでいる子供の写真、一日のあったことを綴っている日記などから笑顔溢れる日々を送っていたことが読み取れた。原爆が投下されるとは知らずに。1945年、8月6日、午前8時15分。原爆という、運命の時がやってきた。原爆投下後、建物は焼けこげ、草木もなくなり、一瞬で広島は地獄絵図のようになってしまった。それまでの人々の笑顔は一瞬にして燃えてしまったのだ。

私は、初めて原爆ドームを見た時、絶句してしまった。剥き出しになった骨組み。今にも崩れ落ちそうな壁。それは、原爆の威力、悲惨さを物語っていた。元は多くの人々が出入りしていた建物だとは信じられない状態だった。皆さんは想像できるだろうか。一瞬にして街のシンボルだったものが今にも崩れ落ちそうな状態になる瞬間を。私は再度、原爆について、詳しく知る義務があると実感した。

私は、広島派遣に参加し、被爆者の方、被爆二世の方の講話を聞き、とても大きなショックを受けた。「原爆は昔話ではない」これは、被爆者の岡本忠さんの言った言葉だ。原爆は、今も名前を「核爆弾」に変えて残っている。岡本さんは、被爆時の記憶がないが、体に傷が永遠に残ってしまった。「次は私の番だ」「死にたくない」。被爆二世の澤原さんの母親の言った言葉だ。彼女は、放射線の影響により、白血病になり、亡くなってしまった。

たった一度の原爆。たった一度放射線を浴びただけ。それなのに、多くの人の命が奪われ、心や体の傷は消えることはない。放射線の影響に対する不安な気持ちは、永遠に続く。そして今、その方々から私たちの世代へ、バトンが受け継がれようとしている。バトンを受け取った私たちができること。その一つは、世界中の人にこの事実を広めること。そのために、まずは、身近な人に原爆について伝えていくことが大切だと考える。人から人へ、それぞれの得意な方法で平和への思いを広め、次の世代へ、世界中の人へ発信していくことが重要だ。平和な世界のために、大切な人を守るために、今、行動を起こすべきなのではないだろうか。

過去に学ぶ平和の大切さ
～広島を訪れて～

日野学園　青木　隆之介

今から79年前の夏、8月6日8時15分。

突如として市街地を覆った閃光。

人類史上初めて原子爆弾が兵器として落とされた日。爆風、閃光、金属さえ融かすほどの熱線が市街地、家屋、学校、ありとあらゆるものを焼き尽くした日。放射線物質を含んだ黒い雨が焼け野原に降り注いだ日。

明るい街は、地獄と化した。水を求める人々で溢れかえった川。全身の皮膚が焼け爛れ、垂れ下がった人々が、行くあてもなく歩いている。今ではとても考えられないかもしれないが、実際に起こった出来事なのである。

派遣に参加する前から、広島に原爆が落とされ、多くの人々が亡くなったことは認識していた。しかし、被害の詳細について知る語り部の方々が高齢化によりこれからも語り継ぐことが

難しくなっていること、自分の曾祖父が戦争によって沖縄で亡くなっていること、そして自分も被害の詳細についてよく知らないということなどが、派遣に参加したいと考えた理由である。

今回の広島派遣を経て感じたことを端的にまとめると、「平和がいかに尊いものであるか」ということになる。資料館や記念館を訪れ、特に印象に残ったのは、被害者の方の写真と共に置かれた遺留品の展示だ。歪んでしまった時計、焼け焦げた弁当箱、融けて固まったビンの蓋…どれも原爆の凄まじい威力とその被害を受けた人々の声を代弁している気がした。また事前学習では、原爆資料館の展示物は刺激の強すぎるものが多いため、開館当初よりも展示物の数がだいぶ減らされているということを学んだ。しかし、制限された数の展示物であっても、初めて見る人に鮮烈なショックを与えるに十分なものであった。このことから、原爆被害の想像もできないほどの凄惨さを実感させられた。海外から訪れた方々が多く、館内は身動きとれないほど混んでいたが、誰一人として騒いでいる人はおらず、国籍は違えども皆が追悼の意を示していることに衝撃を受けた。もしあの時原爆が落とされていなかったら…そんな想像を意識せずとも巡らせてしまうような体験になった。

原爆が落とされたのは今から79年前だが、現在では現実味がより強い話だと僕は思った。むしろ当時よりも核兵器を警戒すべきだ。ウクライナ侵攻、イスラエルでの紛争などにより各国間の緊張は高まり、核戦争の可能性も懸念されている。また北朝鮮のミサイル発射実験なども近年多く行われており、平和の大切さについて今一度考えていくべきだ。

唯一の被爆国である日本に居住し、広島を訪れることのできた僕たちは、これからの世界情勢の揺らぎの中で核兵器が使われるのを阻止するために、原爆の恐ろしさと、繰り返してはならない歴史を伝えていかなくてはならないのではないか。

伝える力

伊藤学園　林　沙良

「今日聞いたことを周りのたくさんの人に伝えて行ってほしい」被爆者の岡本さんが講話で最後に伝えてくださった言葉でした。

派遣に向かう日、新幹線の中で見慣れた最寄り駅の景色を横目にしてると、だんだんと慣れない景色に変わって行き、その慣れない景色が、自分を派遣に行く気持ちにしてくれました。緊張の中到着した広島市の街並みは、小さい建物が多いという想像よりも遥かに発展していたのです。高さの高い建物の数々、街中を駆け抜ける路面電車、笑い声の聞こえてくる歩道。本当に79年前、この街に原子爆弾が落とされたのか。そんな疑問が浮かんでくる中、被爆者講話の始まる時間になり、被爆者の岡本さんのお話が始まりました。

講話は岡本さんの自己紹介から始まり、被爆体験のお話、被爆後の人生のお話、幼かった為被爆の記憶がないこと、たくさんのことをお話してくださりました。その中でも特に心に残ったことがありました。それは、岡本さんのお母さんの手記に残っていた、

「原爆が落ちた時は目の前が真っ暗になって、すぐさま岡本さんのところに走ったものの、気がついたら外にいたこと。街の様子は一変し、家は押しつぶされ、道路は瓦礫で方向が分からなくて、親族の声で一緒に山の方に逃げた。」

私はこの手記を聞いた時、原爆の真相について知れた感覚がしたので、特に心に残りました。それともう一つ、この時に被爆された方のお話

の重要性に気づくことが出来ました。原爆関連のニュースは見たことあっても、実際に被爆された方の証言を聞くことで、ニュース以上にたくさんの知識を得られることができ、その得られた知識を自分の家族や友達、知り合いに伝えることができるという考えに至ったからです。実際、私が心に残ったお話をしている時の岡本さんは、私たち派遣生に語りかけている、でも一言一言に感情が入っていて、私の心に残るような講話をしてくださっていたので、岡本さんが伝えたいことを受け取ることができたのではないかと思いました。岡本さんが、講話の最後に伝えてくださったことは、原爆についてまた改めて考えてみてほしいことや、講話の内容を周りのたくさんの人に伝えてほしいことなど、被爆体験を伝える証言者の方達が次々に亡くなられている現代に生きる私たちに向けた「伝える力」についてのメッセージでした。私はこのメッセージと講話を通じて、講話の内容や、広島で学んだことを伝えていける人になろうと思いました。

帰りの新幹線の中で、広島での三日間を振り返ると、学んだことや発見、気づいたことがたくさんあって、充実した三日間だったなと思いました。そんなことを考えていると、行きにも見えた見慣れた最寄り駅の景色が見えて、品川に帰ってきた感覚がしました。広島で学んだ「伝える力」を、この品川で発揮できる人になります。

平和使節派遣に参加して

八潮学園　石　弥羽

2024年8月5日から8月7日まで平和使節派遣生として広島に行きました。広島では平和記念式典に出席し、平和資料館の見学などをしました。

広島派遣に行く前は、原爆という爆弾の事をあまりよく知らず「沢山の人が亡くなった」「怖くて辛い」ということしか知りませんでした。しかし、実際に爆弾が落とされた爆心地や大きな被害を受けた被爆地を自分の目で見て歩いてみると動画や写真とは印象が違いました。「原爆が落とされて70年間は草木も生えない」と言われていたのに、今の広島はとても活き活きしていて色鮮やかな街に戻っていて当時の方達や今の方達の努力があって復興したのだと思いました。

私が中学生平和使節派遣で心に残っている事は被爆者講話で実際に被爆した方のお話です。

戦後79年が経っていて、当時のお話を直接聞ける機会が貴重でその中で当時の方のお話を聞けてとても勉強になりました。本やネットには書いていない事を沢山知れました。例えば、麦飯を食べる事が恥ずかしい事だということや、被爆による原爆症という病気を引き起こしてしまう事がわかりました。

被爆者講話でお話ししてくださった方は、一歳の頃に爆心地から4kmの自宅で被爆しました。家が潰されていて真っ暗の中、人やものが飛んできて突き刺さりました。その時の傷が体の成長と共に大きくなっていき今でも残っています。当時はその傷がとても恥ずかしく、他の人に見られてはいけないと思い、傷をずっと隠していたそうです。理由は、被爆者であると周囲に知られたら差別を受け、結婚をしていたら離婚させられるという事が実際にあったからです。しかし、ある病院の先生に「子供に原爆の話をしたいから傷を見せてくれ」と頼まれました。それまで恥ずかしいと思っていた傷を見せる事で、後世を担う子供達に戦争や原爆の悲惨さが伝わると思ったそうです。被爆者の方のお話からは、「自分と同じ思いをして欲しくない」「二度と戦争を繰り返してはいけない」という思

いがとても伝わりました。

原爆ドームは何故今も残っているのか。と聞いた時に戦争の辛さや悲しみ、ヒロシマの悲劇を伝える事ができ、平和への一歩となるから残しているそうです。

私達が今できる事は、当時の方達や被爆した方達の思いや願いを後世に伝えて行くことです。これからは目を背けるのではなく向き合い、友達や家族、身近な人にバトンを繋いでいきたいです。

人々の思い

荏原平塚学園　礒邉　悠斗

僕は、8月5日から8月7日にかけて広島派遣に参加してきました。平和式典に参加したり、原子爆弾について学んだりして、今自分が平和に生きていることがどれだけありがたいことか気づきました。中でも僕の印象に残っていることを三つ発表します。

一つ目は、原子爆弾についてです。広島派遣に行く前、原子爆弾がどのようなものかしらべていました。恐ろしさは理解しているつもりでしたが、平和記念資料館で実際に原子爆弾を見て、これが多くの命を奪ったのだと憎しみが湧きました。人々が亡くなっていく姿を見て、とても胸が苦しく平常心では見ることができませんでした。原子爆弾によって全身に大火傷を負ったり、ガラスが身体中に突き刺さったりして十四万人以上の人が命を奪われました。身体の外側だけでなく、内側にも放射線が影響を及ぼし、歯茎から出血し黒い斑点が出ました。戦後79年経った今でも苦しんでいる人がいて、一生消えない傷を負っています。僕はこのことを知って、胸が痛くなりました。自分と同じ人間がこんな形で亡くなるのは、あまりにも残酷だと思いました。

二つ目は、碑巡り講話です。碑巡り講話では僕の班は、寺本真理子さんにガイドをしていただきました。原爆ドームや平和の鐘の近くを巡りました。中では、大きい石碑に昔の地方の学校の名前が載っていました。この学校は、広島の原爆で亡くなった生徒の学校でした。移動中に平和の灯火を見ました。そこで寺本さんに「この火は、なぜ消えないの」と質問されて僕は答えられませんでした。答えは、「世界から核兵器が消えないから」でした。その時に、今現在世界には一万三千発以上の核兵器があることも知りました。そのうちの三千発はボタンを押すだけですぐに発射できるそうです。世界にはまだこんなに恐ろしいことがあるのだと信じられませんでした。早く核兵器のない、平和な世界になりますようにと願いました。ただ願うだけでなく、僕にできることは何だろうと考えたときに、今回の学びを僕だけが知っているのではいけないと思います。だからこそ、今回学んだことを僕は家族や友達に伝えていく必要があると思います。

三つ目は、灯籠流しです。二日目に班の人と書いて流してもらいました。灯籠流しは、魂を弔うことを目的としていて、灯篭の一つ一つを人の命に例えているそうです。僕は灯籠流しを見て、原子爆弾で亡くなった十四万人の広島の人に安らかに眠ってくださいと、心の中で言いながら灯籠を見送りました。広島だけでなく、長崎でも原子爆弾が落とされました。広島と長崎に落とされた8月6日、9日を絶対に忘れないでください。そして平和を願うだけでなく、広島派遣での経験を胸に刻んで二度とこのような悲劇が起こらないように人々の思いを繋いでいきたいです。

原爆は「自分事」

品川学園　藤村　和

二〇二四年、八月六日、午前八時十五分。よく晴れた、とても暑い日でした。私は黙とうを捧げながら、七十九年前のヒロシマに想いを馳せました。その日、たくさんの人々が、たった一発の原子爆弾によって当たり前の日常を失ったのです。地表の温度は四〇〇〇度に達し、十四万人もの人がその命を落としました。どんなに熱く、苦しかったのでしょうか。原爆は、たくさんの人々の幸せを奪った、本当にあってはならないものです。

しかし、この事実を知っても、「そんなの自分には関係のないことだ」と考えてしまう人も多いのではないでしょうか。戦争を知らない世代の私たちにとって、原爆は決して身近なものではありません。広島平和使節派遣に参加するまでは、私もその中の一人だったと思います。それまで私にとって原爆は、「教科書の中の出来事」「自分には関係のない出来事」というイメージでした。でも、今回実際に広島に足を運んだことで、私のこの考えは大きく変化しました。

広島で過ごした三日間の中でも特に心に残ったのは、初日に体験した被爆者講話です。講話をしてくださった岡本忠さんは、一歳五ヶ月の時に自宅で被爆しました。被爆した時にまだ幼かった岡本さんは、その頃の記憶はないけれど、左腕に今も後遺症が残っているそうです。その他にも、放射線の影響で白血病になるリスクが他の人より高かったり、結婚や出産にも不安があったりしたと話していました。原爆が投下されてからもう長い時間が経っているのに、いまだに苦しめられている人がいるという事実を改めて実感し、とても驚きました。

「原爆は怖い話だからといって目を背けないで、しっかりと向き合ってほしいんです。」

これは、講話の最後に岡本さんが話していたことです。私はこの言葉がとても心に響きました。「どうせ私には関係のないことだから」と思うのではなく、私たち一人一人が原爆や戦争について考え、「自分事」として捉えて向き合っていくことが大切なのだと強く思いました。もし世界中の人々が同じように考えられるようになったら、この世界は今よりも平和で、もっと生きやすいものになるのではないかと感じました。

現在、被爆者の方々の平均年齢は八十五歳を上回っています。被爆体験者の高齢化が進んでいく中、原爆の記憶の継承が課題になっているそうです。私は今回平和使節派遣に参加して学んだことを、周りの人や次世代に自分なりの方法で伝え、原爆の記憶の継承に貢献していきたいです。そして、これまでの私のように原爆を「自分には関係のないこと」と考えている人に、少しでも「自分事」として捉えてもらえたらいいなと思いました。

真の平和とは

豊葉の杜学園　佐野　瑞樹

広島に着いてすぐ、被爆者講話を聴いた。講話をしてくれた岡本忠さんは１歳の頃に被爆したが記憶にはなく被爆した跡が腕と頭に残っている。被爆した後の生活は、電気のない家に住むというとても貧しい子ども時代をすごし、被爆者ということでいじめられるかもしれないという恐怖と常に向き合って生きてきたそうだ。特に印象に残ったのは「怖いからと目を背けるのではなく、向き合う。核兵器は地球上にあってはいけない。」と話されていたことだ。

被爆者二世の澤原さんの母は、被爆後白血病と９年間戦ったが、亡くなった。澤原さんの母

は「健康で家族団欒のある生活をしたい」と常々言っていたそうだ。それを聞いた澤原さんは、「命がなければ家族は崩壊してしまう」と感じたそうだ。しかし、澤原さんは娘に、原爆を投下したアメリカを嫌いではないのかと聞かれた時、「リベンジはダメ、憎しみは何も生まない」と答えたそうだ。そのことに僕は驚いた。これらの話を聴いて僕は、「真の平和とは？平和になるために私たちにできることは何か？」と考えながら広島の各地を巡った。

平和記念資料館で僕が一番心に残ったのは、「N 家の崩壊」というタイトルの展示だ。

父親は被爆して 9 回も病院を転々とし、挙句の果てに原爆病院からも治す方法がないと見放され、精神的に病んでしまった。貧しくすさんだ家庭が嫌で、子供達も家に寄り付かなくなり、崩壊していく家庭の展示だった。他にも原爆症のために働けず、困窮した生活を強いられたという話がいくつもあった。原爆は人が死ぬだけではなく、家族という形を失わせることもあるのだとわかった。

被爆者二世の話と平和記念資料館を見て強く感じたのは、家族がいることの大切さだ。この広島平和使節派遣に行く前は、家族がいるということは当たり前だと思っていたが、実際に被爆者の話を聴いて原爆の悲惨さを目の当たりにしてみると、今生きていて健康で家族みんなで笑い合えることは、決して当たり前のことでないのだと感じた。

「人類が発明してかつて使われなかった兵器はない。」これは広島県知事の湯崎英彦さんが平和記念式典で語っていたことの一部だ。僕はこの言葉を聴き、いずれは核兵器が使われてしまうのではないかと恐怖を感じた。実際に今ある核兵器は原爆の数倍から数百倍ほどの威力をもち、3900 発が今すぐにも使える状況にある。つまり、原爆とは決して昔の話ではないのだ。

最後に碑巡り講話の中で、ガイドの方から聞いた「平和の灯火」のできた由来が印象に残っている。「平和の灯火」とは、人の手によって作られたものは人の手でしか無くすことができないという意味が込められている。手首を合わせ、手のひらをひろげた形をし、手のひらの中には火が灯り、核兵器がこの世界からなくなるまで燃やし続けることを意図したモニュメントである。僕はこの「平和の灯火」が一刻も早く消え、核兵器の脅威にさらされない、平和な世界になりますようにと願った。

そのためには、怖いからと現実から目を背けるのではなく、平和と核兵器根絶に向けて人々が手を取り合い、話し合わなければならない。僕たちにできることは、相手のことを思いやりながら発言すること、暴力を振るうのではなく、話し合いで解決することだ。僕にとって真の平和とは、世界中の人が家族と健康で楽しい日々を送れることだと思う。そのために、原爆の過去を知り、核廃絶に向けて考え続けていくことが、大事だと思った。

4. 被爆者講話

被爆者講話

岡本　忠　氏

【岡本氏】先に、少しだけですけど自己紹介をさせていただきます。

私は、1944 年の 3 月に広島市で生まれました。今年で 80 歳になっています。

日頃の活動ですが、私は、皆さんも御存じかと思うんだけど、原爆資料館のピースボランティアに所属していまして、館内と公園のガイドをしています。

こうやって自分自身の体験を話すのは、2017 年、73 歳から始めています。さっきのピースボランティアは、2008 年から始めています。今日は皆さんに私の被爆体験を聞いてもらえるということで、よろしくお願いします。ここから座ってお話しさせてください。

最初に、お手元に配っている資料の説明をさせてもらいます。

1 枚目は、今日の講話の表紙で、その裏側に地図をつけています。これは、話の中で地名とか距離とか、いろいろな場所が出てくるので、地図を参考にしながら想像して話を聞いてもらえたらと思います。

2 枚目の写真は、今申し上げましたように 1 歳 5 か月のときの被爆ということで、実際にはどのくらいかなというのを想像してもらうために写真をつけました。私の写真は、その当時のものは一切ないので、自分の娘が 1 歳 5 か月になったときの写真を見てもらって、ああこのくらいの時かということを想像してもらえたらと思います。

今日は私の体に残った被爆による傷痕の話をしますので、そのことを最後につけている写真を見てもらって、どういう傷痕かということを理解してください。

それでは、早速ですが講話を始めます。

私は自分の被爆体験を講話などで伝えているんですが、それは原爆が投下されたあの日、広島はどうであったか、何が起こったか、それを語り継ぐためです。今日これからお話しする内容は、最初に原爆の話は昔話ではないですよということ、次に私の被爆体験とその後の人生におけるお話というふうに分けてお話しさせてもらって、最後に私から皆さんへのメッセージということで締めさせてもらおうと思います。

それでは、最初の「原爆の話は昔話ではない」。皆さんは若いし、中学生だから、もう 79 年も前の話だったら昔話だよねと思うかもしれないですが、それは決して昔の話ではないということを最初に申し上げておき、また、それはなぜかということを今からお話しします。

第二次世界大戦の末期、1945 年 8 月に、アメリカ軍が地球上で初めて広島と長崎に原爆を投下し、その結果年末までに 21 万人の人が亡くなりました。

ところが、それで終わったわけではなくて、

その後現在も続いていることがあります。それは、そのとき被爆した被爆者のことなんですが、被爆者はその後放射線の影響を受けていろんな障害を発症して亡くなったり、あるいは病気と闘っています。

それ以外に、そういう病気にはかかっていない人もたくさんおられます。でも、その人たちは安心して暮らしているかといったら、そんなことはないんですね。自分の知っている人などが原爆症を発症して亡くなったり苦しんでいるのを見て、自分もいつかそうなるんじゃないか、そういう不安を抱えて病気におびえながら暮らしているというのが実態です。

一方で、79 年間苦しめてきた原爆が、現在は核兵器と言われています。そして、一発の威力は広島に投下された原爆と比べものにならないくらい強力になっております。それが今年 1 月現在の数字ですが、約 1 万 2,100 発あります。そして、そのうち約 3,900 発は、ボタンを押すとすぐに目標を攻撃できる、そういうふうに準備されています。もし 1 発でもそれが使われると、すぐに報復、仕返しの戦争になって、それがどんどん拡大していく。それによって、何百万、何千万の人が亡くなっていく、殺されてしまう、そういうふうになるんですね。

それだけではなくて、地球そのものが汚染されて、太陽光線が遮られ、そして人類が生存していけなくなる、そういったことも予想されています。

このように、原爆、核兵器の話は昔の話ではなく、私たちは今、核戦争が起こるかもしれない、そういう時代に生きているんだということを忘れないでください。これが、今の「原爆の話は昔話ではない」ということのお話です。

次に、私の被爆体験のほうに移ります。1945 年 8 月 6 日に原爆が投下されたんですが、6 日から 8 日までの 3 日間に私がどんな体験をしたのかをお話しします。

私は 1 歳 5 か月、そのとき母と一緒に自宅で被爆しました。ただ、幼かったですから、そのときの記憶は全くありません。でも、私の体には被爆して受けた傷痕が左腕、頭の右側、それから背中の 3 か所に深く刻まれて残っています。

中でも左腕の傷痕、写真の一番後ろにつけていますが、この傷痕は記憶がない私に残されたたった一つの被爆の証だと思っています。

そういうわけで、記憶のない私が被爆体験を話すってどういうことかといいますと、それは母から聞いたこと、そして被爆当時に一緒に生活していた叔父、私の母の弟なんですが、その叔父が書き残していた被爆体験記の中から知ったことをお話しします。

1945 年の 8 月、当時の私の家族は、27 歳の父と 25 歳でそのとき妊娠していた母、それから 19 歳の叔父と私の 4 人家族でした。

自宅は、原爆が爆発した爆心地から北へ約 1.4 キロ離れた場所、町名で言いますと楠木町というんですが、そこにありました。位置なんかは、地図のほうに載せていますので、それを見てください。

6 日の朝、7 時頃、父と叔父を見送った母は、その後すぐに私と一緒に眠っていました。父と叔父は、当時工場のほうに働きに出ていました。

どのくらい時間がたったか分からないんですが、眠っていた母は私の泣き叫ぶ声で気がつきました。なぜか、目の前は真っ暗。何が起きたか分からない。そのときに、すぐに私の泣き叫ぶ声のほうに向かっていきました。

言葉ではそういうことなんですが、真っ暗な中というのは、家が潰されてしまっているから、真っ暗な中も畳があったりしてさっと行ける状態じゃないということですね。いろんな物が家の中でごちゃごちゃになっている、そういった中で私の泣き叫ぶ声のほうに向かって進んでいったということなんですが、そこでやっと私を見つけまして、抱きかかえて、それから外に出よう、要するに暗いところから脱出しようとしたようです。

ですが、実は母はこの後のことについては分からない、覚えていない、気がついたらおまえを抱いて外に立っていたというふうに言ったんです。暗い中でどういうふうにして外に脱出したかということは覚えていないということでした。そういうことで、皆さんにもその場面を話すことができません。

そうして、外に出た様子、これはもう一変していました。要するに、我が家は押し潰され、隣近所も全部押し潰され、家はほとんどないという状態。それから、家の前に道路があったんですが、そこへはいろんな瓦礫が飛んできて道路を埋め尽くしていた状態で、方角も分からなくなっていたと。そこで、母は、どっちへ逃げようか、そういうことを思案したようです。

ちょうどそのときに、近所の知り合いの奥さんが通りかかりました。そして、私たちに、ここにいては危ない、一緒に逃げようと声をかけてくれて、私たちを連れて近くの山のほうに向けて避難をしていきました。

ここで、私の話は少し置いておきまして、そのとき広島の町はどんなになっていたかといったことをちょっとお話しします。

原爆は、島病院という病院の上空 600 メートルで爆発しました。600 メートルというのは、広島にはそういう高い建物はないんですが、東京スカイツリーを皆さんに想像してもらえたらいいんですが、スカイツリーの上のほうぐらいの高さで爆発しました。

爆発すると、強烈な爆風、熱線、放射線が一気に放出されて、原爆を投下する目標になったのは相生橋という橋です。その橋を目がけて投下したんですが、島病院というのはそこから 300 メートルぐらい東のほうに行ったところにあります。ただ、9,000 メートル上からその橋を目がけて落として、300 メートルずれて爆発したということは、もうほぼ狙いを定めたところに命中したということです。

そんなことで、投下目標になった相生橋は大きな橋で、電車も走る橋でしたが、ほとりに歩道部分があったんですが、爆風が川の面に当たって跳ね返る、その力で歩道部分を上にぐっと持ち上げた、そういう現象が起こりました。それから、爆心地になった島病院はレンガ造りの 2 階建てだったんですが、全壊してしまいました。このように、建造物はそういう被害を受けました。

ところで、人間はどうだったかというと、当然外にいた人はそういう風が吹いたら遠くに飛ばされてしまいますね。また、いろんなものが壊れて、窓ガラスが壊れたものなんかが飛んできて体に当たったりしました。このように、遠くに飛ばされたり、そういうものが体に突き刺さって亡くなった人がたくさんおられます。

それから、建物の中にいた人というのがどうなったかというと、まず建物が押し潰されましたから、その中にいた人間も押し潰されて亡くなったり、あるいは亡くならなくても何かに挟まれて外に出ることができなくなっ

た人もたくさんいたんだけど、その人たちはその後発生した火事の炎に包まれて亡くなりました。

今の火事の話ですが、熱線がすごく高温であったということで燃えやすいものに火がついたとか、倒れた家で使っていた火が火元になって市内のあちこちで火の手が上がりました。そして、風にあおられて燃え広がって、それは終日天を焦がすような勢いで燃え続け、爆心地から半径2キロ以内の地域は全焼してしまいました。

その中には、鉄筋コンクリートのものもありました。ほとんどは当時木造建てだったんで、それは全部焼けましたし、鉄筋の建物も中は全部焼かれました。ただ、鉄筋は、建物そのものは焼かれても残っていた、そういう状況です。

火をつけるような高温の熱線はどんなものだったかというと、爆心地の地表面の温度を3,000度から4,000度という温度に熱しました。ですから、そういう熱線を直接体に受けた人は、体の内部組織に強力な傷害を受けて、ほとんどの人が即死しました。

熱線を浴びた人は亡くなった人も多いですが、やけどのひどい人、あるいは軽い人もおられましたが、やけどのひどい人は体の皮膚が剥がれてぶら下がり、あるいは顔は大きく膨れ上がって人相が分からない、そういう状況になりました。

そういうふうになったひどいやけどをしている人、あるいはけがをした人、それぞれみんな火事に追われて広島市内から四方八方郊外に向けて避難していった、逃げていったというのが、私たちが避難していくときに町の中で起こっていたことなんですね。ですから、私たちも北のほうに避難していく人たちと一緒になって逃げていったということになります。

そういうことから、また私の話に戻ります。

そうして避難を続けていて、自宅から1キロぐらい離れたところに電車の駅があったんですが、その駅に近いところまで逃げていきました。多くの負傷者が待機しているという場所でもあったんですが、そのとき母は幸いかすり傷程度で、おなかの子も無事でした。

しかし、先ほどお話ししたように、私は3か所にけがをして出血をしています。そのため、出血箇所の血を止める処置を受けたようなんですが、出血場所に包帯をぐるぐる巻かれました。腕にぐるぐる、また頭にぐるぐる、背中、体にぐるぐる、そういうふうに包帯で巻かれていたようです。ただ、どこの誰にそういうことをしてもらったかというのは分かっていません。

それともう一つ、私たちをそうやって助けてくれた近所の奥さん、この人のこともそこまでしか分かっていないんですね。その後どうされたかということが分かっていません。極端な言い方をすれば命の恩人だと思うんですけど、そういう人がどうなったかというのが分からないのはとても残念なんですが、今もってそれは分かっていません。

それから、母と私は、夕方になって、まさに電車の駅に移動していました。そこは三滝駅というんですが、三滝駅に移動していました。夕方になった頃なんですが、そこで朝出勤していった叔父に偶然に出会うことができました。

叔父は、私たちがいた三滝駅の次の次の駅、下祇園駅というんですが、そのすぐ近くに工場がありまして、そこで働いていたと。その工場は市内から6キロぐらい離れていたので、原爆の影響は少なかったようで無事だっ

たんですね。それで、夕方４時過ぎぐらいに自宅に向けて歩いて帰るとき、三滝駅で気がついた私の母に声をかけられて、再会できたということです。

そして、叔父と再会したんですが、その夜は、自宅辺りは燃えていました。だから、帰ることができなくて、三滝駅の近くで野宿をし、次の朝自宅に戻りました。自宅は、全く跡形もなく燃えていましたし、付近一帯も全部焼かれて焼け野原になっていました。

そういうことで、どこにも行くところもなくなってしまったわけで、ただ、その当時、避難先というのが住んでいる地域で決まっていたようで、それが広島から約 11 キロ離れた安村というところなんですが、その村に避難していきました。移動していったんですね。また一晩そこにいて、翌日、今度は自分たちを探していた父親に出会いました。

父親はどこにいたかというと、広島市内にある黄金山という小高い山なんですが、ちょうど黄金山という山の裏側、爆心地から見たら裏側になるんですね。ということは、原爆の直爆を受けていないんですね。山が塞いでくれたということで、父も工場も無傷だった、元気であったということで、父親は避難先に来てくれた。

避難先に来てくれたという話も、父親から聞いたわけではありません。それはもう想像なんですが、探しに来ていたというのは叔父が言ったことなんですけれど、叔父も父も実は被爆のことを一切話してくれていないんです。逆に、私が聞いていないということもありますけどね。だから、父も叔父からも話は聞いていないと。叔父が書き残した被爆体験記というのは、広島県が被爆者に対して自分の体験を書いたものを県のほうに出してくださいという要請があったときに叔父が出したもので、平和公園の中には国立の追悼祈念館もあるんですが、そこでその体験記を私が偶然に見つけて中身を知ったということです。

そういうことで、父親も一緒になって、結局４人家族全部が無事に再会できたんですね。再会できた後、いろんな話があったんだと思うんですが、父は私と母を連れて父のふるさとに避難していきました。そこは、広島県内ではあるんですが、広島市から約 60 キロ北のほうに外れた村にありました。そちらのほうに避難していき、叔父は働いていた工場のほうに戻っていきました。これは、私の想像です。

どういうことを想像したかというと、大人が３人、両親と叔父、そういう３人と私と４人が田舎に帰るって、田舎に帰ったのは父のふるさとと言いましたが、父の兄も田舎に住んでいたんですね。結局、父は兄を頼って帰ったようです。でも、兄家族は、私たちが無事に帰ってきたことは喜んでくれたんだけど、自分たちを頼って帰ってきたということは受け入れてくれなかったようで、そういう話には一切耳を傾けず、家にも入れてくれなかったというような結末になっています。叔父は工場に帰っていったんですが、その後は、戦争が終わって正式にそこの社員になって定年退職まで働いています。以上が、私の被爆体験ということになります。

次は私の被爆後の人生という話なんですが、今お話ししたように頼りにした兄のところには入れてもらえなくて、結局住む家が見つからなかったので、父は自分たちが住む家を探しました。その間、寝泊まりするところがなかったので、その地域に住んでいた姉夫婦のおうちにお世話になるよう近所の人が世

話をしてくれて、そこに仮住まいをしながら父は家を探したということです。そうやって家を探すことから次の生活が始まったんですが、私が中学を卒業するぐらいまで本当に貧しい苦しい生活であったように思います。

それで、まず１つ目に、貧しい生活ということでお話をしてみたいと思います。

そういう中で父は家を探したけど、家はなかったんです。見つからなかった。仕方なく、農家の納屋を借りました。農家の納屋というのは、農家が百姓をするために使う農機具とか、その当時は農機具といっても牛を使って農作業をするというようなことをしていましたので、そういったものを飼ったり道具を収めたりする建物で、その２階に部屋があったのでそこを借りたということで、そういう小屋の生活が始まりました。

小屋のようなところで大変だったと思うんだけど、私は今思うんですね。どこにも行く当てがない、どうすることもできない、そういうとき見つかった部屋ですから、そこは雨や風が防げて、そして家族が一緒に生活できる、なおかつ新しい生活を始めるためには本当に大切な場所になったんであろうと、そういうふうに思っています。

それから、そこで生活が一旦始まりましたから、私はけがの治療に通いました。治療をするときに、傷口から突き刺さった木くずとか、あるいはハエの幼虫のウジ虫が出て、とても苦しんだそうです。傷は、いつ頃治ったかはっきりしませんが、先ほど申したように傷の跡が残っているということです。小屋の生活は、二、三年ぐらいだっただろうと思います。

ところで、母のことですが、田舎に帰った次の年の２月に無事出産をしました。女の子でした。その後も、母は２人子供をもうけて、結果、男２人、女２人、４人の子供を育て上げました。

次は、電気のないランプ生活の話ということなんですが、どういうことかというと、父は田舎に帰ってから、近くに工場があってそこで働いていたんですが、その工場が閉鎖することになった。閉鎖した後、建物が解体され、解体された廃材をもらって父は家を建てたんですね。小さな家でしたが、山のほとりの小川があるような、小川というよりか谷川と言ったほうがいいのかも分かりませんが、小さな川のほとりに建っていました。しかし、その家はなぜか電気がなかったんですね。明かりは油を燃やすランプで、それが照明でした。

それで、大きくなるまでは何ともなかったのかも分からんのですが、私の記憶にあるのは、小学校４年生になった頃に、どうもよその家には電気があって我が家にはないというのがすごく恥ずかしいような気持ちにもなりまして、父親に聞いたんですね。何でよその家には電気があるのにうちにはないのかって聞きました。そうすると、父親は、私たちの家と隣の家、要するに電気が来ている、ついている隣の家までが結構離れていたんですね。だから、そこに電線を通す工事といったものが、お金が要るわけですね。お金がたくさん要るから駄目だと言ったんですね。今は

無理だと言いました。それを聞いたら、本当はもっとどうしてもつけてくれというようなことも言えたのかもしれないけど、そのときは何も言えなかったというふうに覚えています。いかに家が貧しいかというのが子供なりに分かっていたように思います。

そういう小さな電気のない家、さっき言いました小さな川がすぐそばを流れていたんですが、これがとても私には不気味な小川でした。なぜかというと、夏、特に最近はいつ降るか分からない大雨が降りますが、当時は大体夏に台風が来る頃がすごく雨が多かったんですが、そういうときに小川が増水して石がごろごろと音を立てて流れるんですね。それが、夜寝ているときに耳に聞こえてくるんですが、すごく怖かったということ。

もう一つ、増水がもっとひどくなって、小川を越えて自分の家の床下を流れていたんですね。そのときは、とても寝ておられなかったですね。本当に怖さに震えながら朝まで起きていたという、そういった怖い思い出があります。それが、電気のないランプ生活のお話です。それ以外には、食べるもの、着るものが本当に足りなくて、随分苦労をしたようです。

ところが、私が小学校の高学年になった頃、また父は新しい家を建てたんですね。まさにそれが３度目の引っ越しだったんですが、普通の家です。電気もあって、部屋も４つぐらいあって、そういう家に引っ越しをしました。夜、電気で家が明るいのがとてもうれしかったというのをよく覚えています。

しかし、今言いました、食べるもの、着るものが不足していたということで、まず食べるものの苦労についてですが、母はお金がないために兄嫁のところでお米を借りることが結構あったようなんですね。ただ、それが原因になったのか、あるとき兄嫁が自分のうちの米がなくなった、少なくなっていると母に言ったそうです。結局、母は疑われたということなんですが、このことは私が成人になってからも時々昔話でその話をしていたことをよく覚えています。

そういうことで、お米がなかった。じゃ、何を食べたかというと、麦飯を食べたんですね。麦飯が主食です。麦飯も、今の皆さんが知っている麦飯って米のように白いんですよ。だけど、その時代というのは、本当に黒いというか、茶色がかった黒と言ったらいいか、見てすぐ麦だというのが分かるようなもの、それを使って主食にしていたんですね。それを、小学校時代に母親が弁当に詰めてくれたんですね。それが、本当に嫌でした。おなかが空くから昼弁当は楽しみだったんだけど、いざ食べるときには本当にそれが恥ずかしくて、みんなに見られないように弁当を隠していつも食べていたというのは今もって忘れられないことです。

そういう食べ物がないときですから、おやつなんかないですね。それでもおなかが空くということで、田舎はどこのおうちでも柿とかイチジクとか、そういった木を家のそばに植えているというのがほとんどだったんですね。だから、それが実る頃には、知り合いになったおばさんに頼んで木に登って取って食べるという、そういうこともしていました。それはとてもうれしいことでしたが、そうではなくて普通におなかが空いてたまらんときには、家にあるサツマイモを取り出して、それを水で洗ってそのまま食べるという、生のサツマイモを食べて腹を満たすということをやっていました。

また、引っ越した３度目のおうちの周りには少し空き地があったんで、そこで野菜、キュウリとかナスとかといったものを栽培したり、ニワトリを二、三羽飼って卵を産ませたり、そういうことをしていました。

この頃、小学校の高学年になった頃、私は家のお手伝いが大変だったのをよく覚えているんですが、何をしていたかというと、今言った野菜作りですね。草を取ったりとか、そういった野菜作りが私の仕事であったり、また鶏にも餌をやったり、卵を取り込んだりとか、そういうこと。また、一番下の妹なんかは私と10歳ぐらい違いますから、背中に負いながら御飯を炊くということが私の仕事でしたね。

御飯を炊くって、皆さん、想像できないと思うんだけど、かまどで釜を据えて、その下に火をたいて、煮て、ぐつぐつ泡立ってくると蓋を少しずらして隙間をつけて蒸気を逃がすとか、そういったのを母に言われなくてもできるようになって、そういったお手伝いをしていたのがその時代です。

それから、着るものの苦労は、村に避難して帰ったときは着のみ着のままだったですから、着替えとか、そういったものを母がどういうふうに工面したか、本当に大変やったと思うんだけど、そういう話は聞いていないし、当然見ていないんで分かりません。でも、私が着るものを大切にしたことでよく覚えているのは、母が、みんなが着るもの、上着、下着、靴下、とにかく身につけるものは、破けたりすると必ず修繕をしたんですね。修繕して着るということをやっていました。

それと、私が着ていて、体が大きくなると着られなくなる、寸法が合わなくなったものは、今度は弟がそれを着る。女の子のほうも、上の子が着られなくなったら下の子が着る、そういうふうにして着るものを大切に長持ちさせるという、そういうことを母は自分が工夫して苦労しながらやっていたというのが着るものがないときの苦労した思い出です。

それから、もう一つ、これは皆さん、信じられないと思うんだけど、学校の教科書、特に小学校時代ですが、私は教科書を買ってもらったことはないんですね。今は、小学校は教科書無償という学校もあるようですが、私たちのときは全部自分で用意しなきゃいけないということだったんですが、みんなは新しい教科書を買ってもらっていたけど、私たち兄弟はみんな教科書を買ってもらうことはなかった。どうしたかというと、近所のお姉さん、お兄さん、あるいは親戚のお姉さん、お兄さん、その人たちが使っていた教科書を譲ってもらって使うということをしていました。

何でそれができたかというと、その当時、同じ教科書を何年も使ったんですね。今はどういうサイクルで教科書が変わっていくんか知りませんけれど、そういうことで、新しかったら次の人がまた使えるという、そういう時代でした。ですから、我が家はそうして近所の人に分けてもらったんですけれど、同じ田舎の人たちは兄弟で、そのおうちの中でお兄さんが使ったものを次は使う、そういったことをやっていたんですね、私たちだけではなくて。そういうような時代だったということです。

今話したのが、貧しい生活をした時代のお話をしました。

次に、被爆者として悩んだことが自分の記憶として３つあるので、そのことをお話しします。

１つは、先ほどから話していますように、体に残った傷痕の悩みです。左腕と右の頭の

傷痕は、とにかく人から見えやすいところにあったと。それが、体の成長とともに大きくなっていったということ。左腕の場合は、傷痕の皮膚が指を屈伸したら突っ張るというような後遺症も残りました。

でも、小学校の頃にこの傷痕をどうこう思ったことはない、そういう記憶はないんです。でも、中学校になると、この傷痕を見られたくないという気持ちがすごく強くなったんですね。だから、どうしたかというと、隠したんですね。頭の髪の毛は長めに、ちょうど耳のすぐ上だったんですが、ここぐらいにあったんで、そこが隠れるように髪を長く、散髪をするときそういうふうにしてもらったと。それから、腕のほうは長袖とか上着、そういうものを着て隠しました。

そう言いながら、自分は高校時代、夏は長袖でどうしたのかなというのをあるときにちょっと思い返したんですが、学校は長袖も半袖も今の時代も2種類見るんですね。それを見てから、ああ、私は長袖のワイシャツを着ていたんだなと、間違いじゃなかったなと、そういうふうに思いました。

そうやって隠したんですが、今はもう半袖を着て全然隠していないですが、いつ頃隠さんようになったかというと、頭のほうは白髪が増えてきて、いつの間にか傷痕も目立たないようになった感じがします。ですから、散髪屋さんに行っても、もう全然長めにしてくれとか言わなくなって傷痕が目立たなくなった頃から隠すことをやめたということなんで、時期はよく分からないですが、結局は白髪が増えたぐらいかなと思います。

ただ、左腕の傷痕は、実は、これはやめるのにはあるきっかけがあったんです。70才ぐらいまで、ずっとそうしてきたんですね。隠してきた。私が定年退職後に、知り合いの整骨院に通っていたんですが、あるときに院長先生が私の左腕を見て、「岡本さん、その傷痕を写真に撮らせてくれ」と言ったの。ちょっとびっくりしました。何で写真が欲しいんですかと言ったら、実はその院長先生は若くて小学校の子供がいるんですが、その子供に原爆のことを教えてやろうと思うんだけど、そのときに岡本さんの傷痕の写真を見せながら話をしてやりたいと、そういうふうに言われたんですね。そういうことやったら断るわけにいかないなと思って、写真を撮ってもらって、先生は子供さんに話をされたようです。それが、今度は逆に自分のヒントにもなったと。えっと思ったんですね。先生がこの写真を持って子供に話をするということは、この傷痕の写真というのはそういうことに役立つものなんかなというのに気がついたというか。それまでは、傷痕の話をするときには今話しているように全然写真も見せませんし、言葉だけで言っていたのね。でも、やはりこういう場でお話しするときに写真があれば、私が言っていることが直に感じてもらえてより伝わっていくんじゃないかなと、そういう気持ちになったわけですね。それで、早速それを取り入れて、普通はパワーポイントというものを使ってやるんですが、その中にそこにある写真を載せて話をします。そういうことを始めてから、隠すこともやめたし、皆さんにも見てもらうようにしたということです。

それが傷痕の悩みなんですが、次に私の結婚と子供たちの出産の悩みなんですが、私は29歳で結婚したんですが、結婚するときに相手の人に自分が被爆者であるということがなかなか言えなかったということなんです。

何で言えなかったのかというと、私が若い頃聞いた話なんですが、被爆者は結婚できないんだと。もし相手が被爆者であることを知らなくて結婚したとしても、あるときにそれがばれた、被爆者であることを相手が知ったときには離婚される、離婚された、そういう話も知っているんですね。

実際に私の知り合いの女性は、そういうことで結婚してから相手の母親に「あんたは被爆しているんか」と言われて、すぐ離婚させられたということなんですけど、そういう話が頭にあったもんですから、自分も同じように駄目になるかなという、そういう心配もあって言えなかったんですね。

でも、幸いにして、相手に言ったときに、全然で、自分はそれを言ったら断わられるというんですかね、まさに相手の両親も被爆者やったら駄目よって反対されるんじゃないかと思っていたんだけど、私の場合はそれがなかったんですね。決心して相手に言ったら、ああ、そうなんです？というぐらいのことです。でも、両親にも話してほしいと言ったら、両親に話しても私と同じことだったよということで、ほとんど反対とかいった意見がなかったということで、何のこともなく結婚ができたんですね。

もう一つ、子供の出産というのは、やはりこれも被爆者の子供は放射線の影響を受けて健康な体で生まれないこともあるということが言われていたんですね。だから、そのことが頭にありました。でも、私は今子供が２人、孫が３人なんですが、５人とも皆無事に健康で生まれて、その後健康に育ち、私の子供は娘２人なんですが、結婚して孫ができて、それらもみんな元気に成長しているということで、特に被爆が影響したということはありませんでした。そういうことで、心配し過ぎと言えばそうなんですが、でも被爆者としたらどうしてもそういうことを考えるということのお話です。

３つ目は、生きている限り消えない原爆症の悩みということなんですが、実は私は被爆者ということで、被爆者としての病気になることがすごく心配で、定期的に年１回健康診断をずっと受けてきました。その中で、健診でも表れない、だけど自分で実際に体験した不安であったということが２度ほどあったんですね。

心配が２度あったというのは、40 歳の頃に全身がすごくだるくなって、それが１か月以上続いたことがあったんです。私が聞いていた、被爆者は全身がだるくなり無気力になる病気になって、それが原爆ぶらぶら病というふうに言われた時期があったんですね。その病気にそっくりな状態だったんで、自分もそれにかかったのではないかと思って心配したということです。そのときは、人間ドックを受けましたが特に異常はないということでした。

もう１つは、63 歳になってから、これも私だけの症状だったんですけど、毎朝寝ているときにおなかが痛くて目が覚めるんですね。最初は、よく分からないんですが、目が覚めたら、何で目が覚めたか分からない状態で、じっとしていたらおなかが痛いなと思って、腹痛がひどくなってトイレに駆け込んで、下痢とか嘔吐とか、そんなのを繰り返して、それから体いっぱい汗をかいて、その後に今度は自分の体がどんどん沈んでいくんですね。ずーっと沈んでいく感覚がしたと思ったら気を失うという、それが１年間に７回あったんですね。それが何回も続くうち、途中か

ら、ああ、自分は死ぬんかも分からんなというような死の恐怖というものを感じました。それは、気を失ったままもう戻らないということになるかなという、そういうことがあったんですね。

そのときは、また胃と腸を内視鏡で検査をしました。でも、このときも原因は分からないということで、自分はひょっとしたら被爆をしていることが影響しているんかなと思ったんだけど、そういうことは検査結果で言われなかったから、原爆とは関係ないんだなと安心していました。

でも、2022 年、2 年前ですが、その検査の中に前立腺がんという検査も受けていたんですね。前立腺のがんというのは、血液検査で PSA の値がある数値（基準値）以上になったらがんが疑われるという、それが 2022 年に基準値をオーバーしたんですね。基準値をオーバーしたから行きつけの医者から、専門医の検査を受けてきてくださいと言われて検査を受けたけど何でもなかった。だけど、数値はその後も上がっていったんですね。がんの検診の検査は 3 か月ごとやったかな、一旦上がったからそれからは 3 か月ごとに測っていて、どんどんどんどん上がっていったんですね。1 年たったときに、基準値の 2 倍になったんですね。そうしたら、また医師が検査に行ってくださいと言うので行ったら、今度はがんの可能性があると言われました。

2 月に広島の市民病院のほうへ行って検査を受けたら、間違いなく悪性のがんですよと言われました。すぐ手術しましょうと言われたんだけど、転移をしていたら手術はできないと言われて、転移しているかどうかを検査しましょうということで検査を受けて、転移のほうはなかったんです。手術をしたのは 4 月ですね。4 月中頃の手術をして、今はもう 3 か月間は過ぎたんですが、手術後 1 か月目と 3 か月目に検診に行きました。

1 か月目は、どっちかというと術後だからという検査、診察ですね。でも、3 か月ごとにこれからずっと検査があるんですね。それは、がんが再発するかもしれないという、医師にはそう言われました。今はないけれど再発する可能性がゼロじゃないですということで、検査をする。一応 3 か月ごとを繰り返して 5 年間ということで、5 年間は再発を心配しながら生活せにゃいけないと思うし、5 年では済まないかも分からんですね。一生続くかもね。今回のがんは、原爆によるがんかどうかというのは分からないです。医者は、否定はしない、影響がないとは言わないけど、影響しているよとも言わない。それは、まだ結局医学界の中でそういうことが分かってないということなんですね。でも、そういうことで、私はずっと心配が続くということと、やっぱり定期的に健診を受けておかんといけないなというのを今回病気になったことですごく感じました。

最後になりますが、私からのメッセージということで、もう少しお話しします。

核兵器は、人類にとって最悪な爆弾で、地球上にあってはいけない、そういうふうに思っています。それで、皆さん、今日私が話

したこと、要するに原爆に遭った、被爆したということ、それを聞いて、皆さんが自分自身にそういうことが実際に起こったらどうするか、またその後はどのようにして生きていくんか。これを、多分そういうことを考えたことはないと思うんだけど、一度は考えてみてください。

最後になりますが、私から皆さんにバトンパスをさせてください。本当に簡単なバトンですから、いいですか。今日聞いたこと、それから、少しの資料しかないんですが見たこと、そして自分自身が感じたこと、これを忘れないで、家族とか友達、知り合いの人に話し、伝えてください。これは、私のバトンです。

ただ、それは受け取ってもらえると思うんだけど、そこで止めないでほしいの。必ずまた次の人にバトンを渡してほしいんです。どうしてかというと、バトンをつなぐことによって平和を願う人の輪が広がる、そして核兵器のない、戦争のない世界平和の実現に必ずそれがつながっていくと、そういうふうに私は考えているので、どうかよろしくお願いします。

長時間になりましたが、ありがとうございました。

《質疑応答》

【品川区立荏原第一中学校　水野】

当時の厳しい生活の中で、今振り返ってみてお母様のことはどう思っていましたか。

【岡本氏】

やっぱり生活という面で、親だから子供を守るのは当然かもしれんけれど、命の恩人だと思いますね。感謝しかないです。あのときに母が自分を外に連れ出してくれんかったら、もうそこで死んでいたと思うんでね。まあ、自分が今こうして生きているのは、そのときの母が助け出してくれただけじゃないんですね。それ以外がいっぱいあるんですけれど、でも最初に救出してくれたのは母であるということで、それから感謝いっぱいではあるんですけれど、でもなかなか母の思うような人間になっていないというか、親孝行をそれだけしてきたかというと足りんかったなという部分もあるんで、それでも子供をずっと死ぬまで心配してくれたということに対する感謝は感じています。

【品川区立品川学園　藤村】

これからこの話とか考えたことを伝えていくこと以外に、私たちがこれからの世代につないでいけるとしたらどんな行動をしてほしいとかはありますか。

【岡本氏】

まず、何を話すかという部分においては、いろんなことを勉強して、吸収したことは話し伝えてほしいんだけど、私が話すことで一番思うのは、原爆、今は核兵器ですが、それが使われて、それを体験した人間はどんなふうになるのか、それをしっかり勉強してほしいんですよ。

もっと言うと、私が言いたいのは、原爆というのは本当に怖いものなんですね。それが分からないと、今言われている原爆、核兵器をなくそうということを広めてみんなで協力してなくしていこうと言っても、実際、核兵器はどんなに怖いか、それをはっきり知らずにそういう活動はできないと思うんですね。だから、怖いからといって目を背けるんじゃなくて、本当にそれに向き合ってほしいですね。今残っている怖い写真とかいうのもたく

さんあるし、それを絵にするものもあるし、また話でも本当に怖い話っていっぱいあるんですよ。でも、それは聞きたくないというんじゃなくて、進んで聞いてほしいんですね。

何で進んで聞いてほしいか、それは本当のことが分かるからです。そういうことが分かった上で行動をしてほしいんですが、その行動というのは、人それぞれ。これがいいですよ、こうしてくださいというものはないんですよ。皆さんの中でも得意なものがあると思うんだけど、例えば楽器を弾くのが得意とか、絵を描くのが得意とか、詩を作るのが得意とか、いろんな得意なことがあると思うんだけど、そういう得意なものを使って平和活動というのもできるんですね。だから、いろんな方法があるので、私はこれがいいですということはなかなか言えないです。だけど、今言ったどういう恐ろしいものかというのが分かれば、本気になってそれをなくしていこうという気持ちにもなるということなんで、私からこういうことがいいですよというのは言わないほうがいいと思う。それしかないかと思われるかもしれないし。だから、今言ったように、自分が得意とすることがあったらそれを利用するのが一番いいと思うんですね。

でも、自分１人でできないことだったら、仲間をつくって仲間と共にやるとかいうこともいいですし、自分１人では何もできへんという思いもされるかもしれないけど、１人でなくても仲間とやるようなですね。だから、やり方というのはいろいろあるんで、まだ中学生やから、まだまだこれからいろんなことが考えられるかもしれないんで、どうやったらいいかというのを頭に置いて勉強なりいろんなことをしてもらいたいと思います。

【品川区立伊藤学園　林】

叔父が残してくれたものを資料館で見つけたときに抱いた感情や、どのようなことを感じたのかを教えてもらいたいです。

【岡本氏】私自身がこういう活動をしようと思ったのは、前からそうしたいと思って始めたことじゃないんです。だから、原爆のこととか、親とか叔父さんのことでも、どうだったかということを知ろうとするという気持ちはもともとなかったんですね。

だけど、私がこういうことを始めたのは、最初に言いました2008年に原爆資料館でピースボランティアを始めたんだけど、その前に資料館で守衛の仕事をしたんですね。守衛というか、警備員の仕事を１年ほど資料館の中でやったんです。そのときに、ピースボランティアというユニフォームを着たボランティアがあることを知って、それから少しずつ原爆のことに興味が湧いてきてボランティアをやりたいなと思ったけど、資料館が募集をしないとなれないということやったんで、募集を待っていたら、１年先か２年先かだったんだけど、2008年から始めて、そうするとどんどんいろんなことが分かるんですね。

仕事をしている間でも、遺品とかをいっぱい見て、あれを見ると心に迫ってくるものがあるんだけど、そういうことを重ねながらだんだん原爆の被害のことをいろいろ考えるようになって、2013年にピースボートって知っているかね。知らないですか。被爆者を乗せて世界を一周して、寄港地で原爆の証言をするという、ピースボートというところが企画をして年に１回やっていたんですね。それに参加したときに、私は一番若い被爆者で、年上の被爆者は80歳、そういう人たちが10人近くいて、その人たちの話を聞いて、

自分も同じ被爆者なんだから話をしていきたいなというふうに思ったんですね。そういうことから始まっていったんですね。

そして、本格的に、皆さん、児童・生徒の前で話をするようになったのは、2013年から広島市が始めた被爆体験伝承者という研修があって、それと同時に被爆者の証言を養成する2コースがあったんですね。私は被爆者やから、被爆者の証言者になる研修を受けたいと言ったら、駄目だと言われたんです。被爆者だからいいでしょうと言ったら、駄目ですよと言われた。何でと言ったら、記憶がない被爆者は被爆証言ができませんよと。被爆証言者の研修は受けられませんよと言われたので、仕方なく被爆体験伝承者の研修生になったと。

そうしたら、原稿を書くんですね。伝承だから、ほかの被爆者の話を伝えるんですね。だから、ほかの被爆者の話を一生懸命聞いて原稿を作ると。原稿を作るときに、どういう内容を入れるかというと、伝承する人の話は必ず入れないといけない、それと広島の原爆のこと、もう一つ自分が言いたいこと、皆さんに伝えたいことがあったら入れてくださいと言われた。そこで、私は初めて自分のことでもいいですか、私の被爆のことでもいいですかと聞いたら、いいですよと言われたの。それで、私の被爆のことも書けるなと。

でも、以前原稿を書こうとしたときに、私は全然知らないんですね、自分のことを。今日ちょっと話したことしか知らない。原稿を作り始めたときは、叔父の体験記もなかったと。原稿を作り始めても、なかなか自分のことは書くことが少ないんですね。それで、一生懸命探したんですよ。何かないか、自分に関わることがないか、自分が住んでいたところの被爆した状況だの何かとか、そこで被爆した人たち、そんなことをどんどん調べていたと。それで、叔父さんの名前を検索したんですね。そうしたら、叔父さんの名前がヒットしたんですよ。それで初めて、叔父さんが書いたものがあったと思って、それを読ませてもらったら、実は叔父さんは私の家族と一緒にそのときに生活していたというのをそこで知ったの。

それまでは、原稿を作り始めたときは、両親と私の3名が被爆したということで原稿を書いていたんですね。それが、叔父さんの体験記が見つかったら、叔父さんもそこで一緒に生活していたとあったもんで、家族の4人の話に変わったんですね。だから、叔父さんの原稿が見つかったときはすごくうれしかったよね。これで原稿が少し、私のことが前よりかたくさん書けるというふうになったんでね。驚きもあったし、叔父さんがまさか出しているかなと思いながら、でもあるかもしれないという思いで検索したら名前が出てきて、叔父さんたちが県の募集に応えて出したものが祈念館の検索所というか、書類がたくさん収めてあるところと写真なんかが検索できる部屋が祈念館の地下1階にあるんですが、皆さんがもし行かれたら自分たちで検索もできます。そうやって、そこで発見して、本当にあったことにびっくりしたし、すごくうれしかった。でも、そのことを叔父さんに聞こうにも叔父さんはもう死んでいなかったから、そのことを確認することはできない。私が叔父さんのそれを見つけたときは、そういう状況でした。

（代表生徒より感想）

【品川区立大崎中学校　小橋】

今日は、貴重なお話をしていただきありがとうございました。もともと広島に来る前に少し原爆や戦争中についてのことを調べたんですけど、こういう実体験みたいなことはあまり出てこなくて、被爆した後の家の様子とか、ランプを使っていたりとか麦飯を食べていたりしたということが、すごく現実味があって衝撃を受けました。

戦争といっても、核兵器ってあんまり関係ないかなとか思っていたんですけど、ボタンを押したらすぐ発射できる状態のものがたくさんあるみたいな話もしていただき、すごく怖いものなんだなというのを実感することができました。ありがとうございました。

今日していただいたお話とかを、私たちができる限りたくさんの人に、家族とか友達とか学校の人とかに伝えていきたいなと思いました。今日は、本当に貴重なお話をありがとうございました。

【生徒一同】ありがとうございました。

【岡本氏】ありがとうございます。

令和６年８月５日（月）

YMCA 国際文化センター

《被爆者講師プロフィール》

【氏名】岡本（おかもと）　忠（ただし）

【被爆時年齢】１歳５か月

【被爆時の状況】

爆心地から北へ１．4km の広島市楠木町の自宅で母とともに被爆。爆風で押しつぶされた家の下敷きになり、左手首、右耳上の頭部、背中に傷を負う。父は爆心地から南へ 4km 余り離れた仁保町楠那の工場で被爆し、翌日に再会。

【被爆後】

父の実家、安野村（現安芸太田町）で暮らし始めるが、工場の廃材で家を建て、電気がない生活。白飯を食べたことはなく、学校の弁当はいつも黒い麦飯。「戦争が無かったら、原爆にやられなかったら、身体に傷跡が無かったら、嫌な思いもしなかっただろうに。なんで、原爆を落としたのか、なんで戦争したのか、どっちも憎い」と思い続けていた。2008 年、64 歳から広島平和記念資料館のピースボランティアとして活動。2019 年、75 歳から広島県原爆被害者団体協議会・被爆を語り継ぐ会の碑巡りガイドとして活動。

5．碑めぐり講話

日時：令和６年８月７日（水）

午前９時 00 分から 10 時 45 分

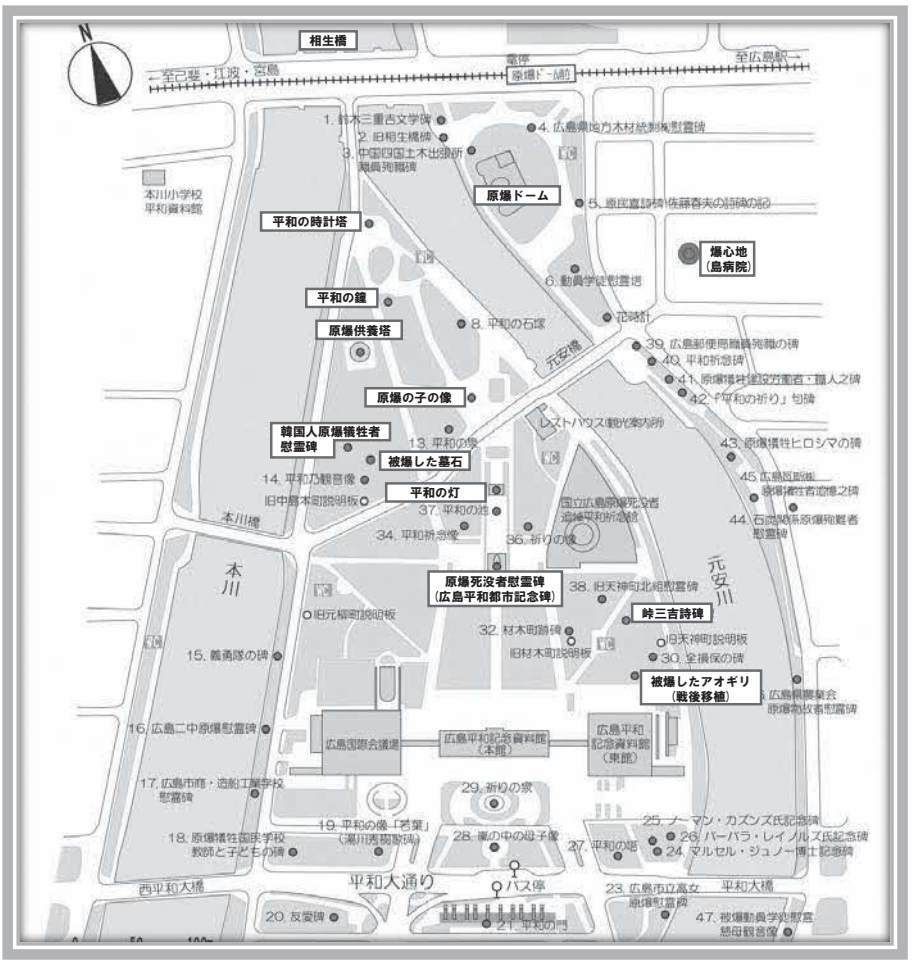
場所：平和記念公園内

講師：木原（きはら）　省治（しょうじ）　氏

　　寺本（てらもと）　真理子（まりこ）　氏

　　半田（はんだ）　修三（しゅうぞう）　氏

３つのグループに分かれ、講師の方によるガイドにあわせて平和記念公園内に設置されているさまざまな石碑や遺構などを見学しました。



6. 成果報告

各中学校を代表して参加した 15 名の派遣生は、学んだこと、感じたことを各学校・地域に伝えるため、下記のとおり報告会や発表を行いました。

東海中学校　　神河　英里

【日時・場所】令和 6 年 12 月 18 日　体育館

【方法・対象】報告会　全校生徒・保護者

【発表の内容】

学習成果発表会にてパワーポイントで作成した資料 10 分程度で以下の内容を発表した。

①導入

日常が消えたらどうするかと問いかけ被害を述べる

②広島派遣について

③本題

被害者講話を聴いて→平和の灯火→記念平和資料館→碑巡り講話→灯篭流し

④参加してみて

⑤私たちができること

大崎中学校　　小橋　優菜

【日時・場所】令和 6 年 10 月 26 日　体育館

【方法・対象】学習発表会

全校生徒および保護者　約 330 人

【発表の内容】

「ちいちゃんのかげおくり」を読んでから、戦争に興味をもち、戦争に関する小説を何冊か読んだが、広島の原爆について詳しく記述されている小説は読んだことがなかった。今回広島に行き、被爆者の方々のお話を聞いたり、式典に参加したり、資料館を見たり、実際に戦争の爪痕を見たりして、少しずつ自分ごととして捉えることができた。将来、物語を作ることに関わる仕事をしたい。この夢が叶ったならば、「広島で起こったことを忘れない」「二度と繰り返させない」という想いを次の世代へと伝えていきたい。

浜川中学校　　下鶴　栞

【日時・場所】令和６年12月７日　アリーナ

【方法・対象】報告会　全校生徒、教職員、保護者

【発表の内容】

人類史上初めて原爆の被害を受けた広島の人的・物的被害について、さまざまな資料をもとにして紹介した。特に、爆風の影響と放射線の影響に関しては被害を受けた方々の写真を紹介することで、原爆の恐ろしさを強調して伝えた。

また、被害だけではなく、その後の復興にも焦点を当てることで、過去と現在の比較を通して、「平和」の尊さとともに「平和」とは何かを改めて問いかけた。

鈴ヶ森中学校　　和氣　芽佳

【日時・場所】令和６年10月26日　体育館

【方法・対象】文化祭　約400人

【発表の内容】

体育館全体に聞こえる声でゆっくり話すことを意識し、自分が思っているよりもゆっくり話すと聞き取りやすい。と言われたのでゆっくり話しました。

碑めぐり講話をして下さった寺本さんの「私たちは微力だけど無力じゃない」という言葉がしっかり伝えられるようにするため、強調して話しました。

自分たちにもできることはあるということが分かってもらえるように、今できることを言うときはゆっくり強く話しました。

冨士見台中学校　　中山　優月

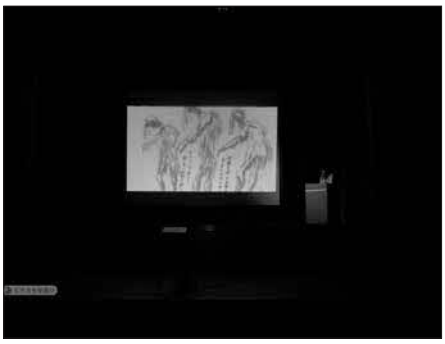
【日時・場所】令和６年 10 月 26 日　体育館

【方法・対象】文化祭　生徒・教職員・保護者

【発表の内容】

講話で聴いた「原爆は昔話ではない」という言葉について、実際に起きた出来事、被害の詳細を踏まえて、被爆者の方がどんな思いでこの言葉を言ったのかを説明。

また、記憶に残りやすいようにクイズを用いて説明。「3 日後に再び走り出した移動手段は何か？」「平和記念公園は原爆の何年後につくられたか？」原爆の被害を詳しく伝え、悲惨さも訴えました。その上で私の考え方や講話で聴いた考え方をお話しました。



荏原第一中学校　　水野　優一

【日時・場所】令和７年２月 15 日　体育館

【方法・対象】報告会　全校生徒、教員、保護者　約 500 人

【発表の内容】

広島派遣を通して印象に残った３つのこと

・被爆者講話

・資料館の見学

・碑めぐり講話

その他「被爆」と「被曝」の違い、お好み焼きと戦争のエピソード

荏原第五中学校　　東　かや乃

【日時・場所】令和６年10月26日　本校

【方法・対象】文化祭　生徒、教員、保護者　約500人

【発表の内容】

・平和記念博物館や平和記念式典で知った歴史の事実を実際の写真とともに伝える。

・生徒と同年代の特攻隊の人たちが経験した辛い経験や外国人への差別など、知る事から始める重要性を知ってほしい。

・戦争や原爆の歴史を知り、その事実と向き合い、次の世代へと語り繋ぐことの大切さを伝える。

荏原第六中学校　　池田　耀

【日時・場所】令和６年10月19日　体育館

【方法・対象】学習成果発表会　全校生徒

【発表の内容】

①広島に行った理由

自分の曽祖父の話：曾祖父が戦争時にウズベキスタンで捕まり、どんな生活をしたか。その後ウズベキスタンへ行き、桜を植えた

②広島に行って印象に残った言葉

③広島に行って思ったこと、感じたこと

④最後に伝えたいこと

戸越台中学校　　小林　詩子

【日時・場所】令和 6 年 11 月 25 日　体育館

【方法・対象】朝礼　全校生徒　約 300 人

【発表の内容】

PowerPoint で写真を多く使いながら発表

・原爆投下前

　戦時中の日本、当時のヒロシマ

・原爆投下、投下直後

　資料館での写真を説明、被爆者講話で学んだこと

・復興に向けて

　広島の現存の町の様子や平和の灯火について

日野学園　　青木　隆之介

【日時・場所】令和 6 年 10 月 26 日　体育館

【方法・対象】文化祭　5 年生～ 9 年生及び保護者

【発表の内容】

①広島平和使節派遣の参加理由について説明

②派遣事業について

　非核平和都市品川宣言 40 周年、派遣の目的

③「もし落とされなかったら？」

　今回の派遣を通しての大きな疑問

④参加の理由

⑤原爆被害の詳細

　死者数、熱線、後遺症

⑥派遣に参加した感想

⑦まとめ

　「もし落とされなかったら？」のアンサー

　戦争に正しい終わらせ方はない→話し合っていこう

伊藤学園　　林　沙良

【日時・場所】令和６年10月25日　アリーナ

【方法・対象】報告会　児童生徒・保護者　600人

【発表の内容】

①８月６日と聞いて思い浮かべること

→史上初めて原子爆弾が投下された日である

②広島平和使節派遣報告

・原爆資料館について

ガラス瓶、当時着用していた服の写真を見せ、原爆の威力や怖さを説明

・被爆者講話について

特に心に残ったことは、「原爆が落ちた瞬間に目の前が真っ暗になった。気が付いたら外にいた。街の様子は一変し、家は押しつぶされていた。」話を聞いたこと。

・メッセージ

被爆体験を伝える方々が亡くなっており、今生きる私たちができることは、原爆のことを知ること、伝えること。まずは原爆のことを知ることから始めてほしい。

八潮学園　　石　弥羽

【日時・場所】令和６年10月26日　アリーナ

【方法・対象】学習成果発表会　５～９年生　501人

【発表の内容】

中学生広島平和使節派遣で学んだことを、

スライドを使用しながらプレゼンテーションしました。

（発表内容）

①広島派遣に行き、現地で学んだ戦争の悲劇。

②原爆の説明。

③平和記念式典に参加し、印象に残ったこと。

④体験した当時の方々について思うこと。

⑤灯篭流しの体験。

⑥この広島への派遣を通して考えたこと、感じたこと。

荏原平塚学園　　礒邉　悠斗

【日時・場所】令和６年10月25日　アリーナ

【方法・対象】報告会　５～９年生の児童生徒、保護者約450人

【発表の内容】

・日程について

・原子爆弾とは

　　原子爆弾がもたらした被害

　　原子爆弾はなぜ落とされたか

・広島平和使節派遣で学んだこと

・平和とは

・これからの平和のために私たちができること

品川学園　　藤村　和

【日時・場所】令和６年10月18日　アリーナ

【方法・対象】報告会　生徒（５～９年生）　約600人

【発表の内容】

①はじめに

②原爆の被害について

③三日間の予定

④被爆者講話

⑤平和記念式典

⑥碑めぐり講話

⑦平和な世界を実現するために

豊葉の杜学園　　佐野　瑞樹

【日時・場所】令和６年10月19日　アリーナ

【方法・対象】学習成果発表会　児童・生徒及び保護者（教職員含む）約800人

【発表の内容】

被爆者である岡本忠さんの講話から、被爆した後の恐怖と常に向き合う大変さ、背を向けるのではなく向き合って生きてきたことから核兵器根絶に向けての思いを伝えた。

また、平和記念資料館の「N家の崩壊」という展示から、家族がいることの大切さや普段の生活の中で家族がいて、健康で笑い合っていられることが当たり前ではないことなど、展示資料から平和な世界に向けて、自分自身が真の平和に向けて、相手を思いやる気持ちで発言することを伝えた。

第２部
青少年長崎平和使節派遣

●派遣生

日下　友乃（会社員）　石田　健悟（大学生）
相馬　桃香（高校生）　松尾　航大（中学生）
福田　るのん（中学生）　桐生　一花（中学生）

●引率者

鈴ヶ森中学校教諭　平井　寛子
区長室総務課　中村　誠

（敬称略）

1．行動日程表

令和６年度　青少年長崎平和使節派遣　令和６年８月８日～10日（２泊３日）

８月８日（木）

時　　間	行　動　内　容	場　　所
6：45	集合・出発式・羽田空港へ移動	ＪＲ大井町駅
8：30～10：30	航空機搭乗（羽田空港～長崎空港）	
12：00～13：00	昼食	長崎市内
14：00～18：00	青少年ピースフォーラム 「被爆体験講話」「室内学習と被爆建造物等フィールドワーク」「キャンドル作成」	平和会館ホール 平和公園周辺
19：10～20：10	夕食	長崎市内
20：30	ホテル着・一日のまとめ	長崎Ｉ・Ｋホテル
22：00	就寝	

８月９日（金）

時　　間	行　動　内　容	場　　所
7：30	集合・朝食	長崎Ｉ・Ｋホテル
10：40～11：45	平和祈念式典参列	平和公園
12：30～13：30	昼食	長崎市内
14：00～16：00	青少年ピースフォーラム 「平和学習（意見交換）」	出島メッセ長崎
16：30～18：30	長崎原爆資料館見学	長崎原爆資料館
19：00～20：00	夕食	長崎市内
20：30	ホテル着・一日のまとめ	長崎Ｉ・Ｋホテル
22：00	就寝	

８月10日（土）

時　　間	行　動　内　容	場　　所
7：10	集合・朝食	長崎Ｉ・Ｋホテル
9：00～11：00	碑めぐり	平和公園周辺
11：30～12：30	出島見学	出島
12：40～13：40	昼食	長崎市内
15：19～18：15	航空機搭乗（長崎空港～羽田空港）	
19：30	解散式・解散	ＪＲ大井町駅

「青少年ピースフォーラム」とは？

（主催：長崎市　運営：公益財団法人 長崎平和推進協会）

毎年８月９日の平和祈念式典にあわせて、全国の自治体が派遣する平和使節団の青少年と長崎の青少年とが一緒に被爆の実相や平和の尊さを学習し、交流を深めることで平和意識の高揚を図ることを目的として実施しています。

このフォーラムでは、大学生や高校生などで構成される長崎市の「青少年ピースボランティア」が中心となり、進行やフィールドワークの案内などを行っています。

◎事前学習会・事後報告会

第１回事前学習会　６月24日（月）

派遣生が派遣の目的を理解し、より高い意識を持って、派遣に臨めるよう学習しました。
（広島・長崎派遣合同で実施）

（1）派遣生自己紹介
（2）非核平和都市品川宣言事業について
（3）平和使節派遣事業について
（4）事前学習
（5）次回までの課題について
（6）派遣日程や生活面・健康管理について

第２回事前学習会　８月２日（金）

各自が第１回目の事前学習会で決めたテーマについて発表と意見交換を行いました。
区内在住の被爆２世 澤原義明さんより、ご自身の母の手記をもとに「平和について」講話をしていただきました。

（1）各自の学習内容の発表・意見交換
《グループテーマ》
Ｄグループ「外国×長崎」
Ｅグループ「被爆者の方達の思い」
（2）被爆２世講話
（3）「派遣のしおり」内容確認
（4）派遣の諸注意事項について

事後報告会　８月21日（水）

各グループで決めたテーマについて学んできたこと、今回の平和使節派遣で各派遣生が学んだことを１グループずつ発表しました。
また今回の平和使節派遣の成果を、３月に行われる非核平和都市品川宣言40周年記念式典で発表するために、各自の役割を決めました。（広島・長崎派遣合同で実施）

（1）発表準備
（2）派遣の成果発表
（3）40周年記念式典での役割決め

2. 長崎での主な活動

（1）青少年ピースフォーラム開会行事（被爆体験講話）

〈日　時〉8月8日（木）14：00～15：15
〈場　所〉平和会館ホール
〈内　容〉開会式では青少年ピースボランティアが司会を務め、長崎市長が開会の挨拶を行いました。その後の被爆者講話では、11歳の時に爆心地から1.3㎞離れた場所で被爆した松尾幸子さんのお話を聴きました。

●被爆者講話（松尾　幸子さん）

国民学校5年生の（11歳）の時、爆心地から1.3㎞離れた場所で被爆した。松尾さんは無傷だったが、弟たちは怪我や火傷を負った。0.7㎞地点にあった我が家は跡形もなく焼け、姉の骨だけ出てきた。倒壊した建物の下敷きになった父は8月28日に亡くなり、兄2人、姉、兄嫁、叔母2人も亡くなった。

オープニングセレモニー

被爆体験講話の様子

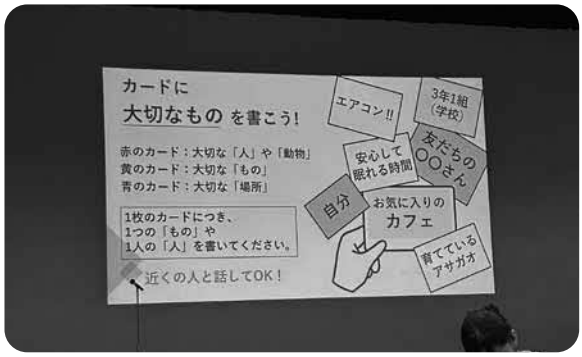
〈参加しての感想〉

被爆した方のお話を聞き、改めて原爆の悲惨さを知ることができました。家族や知り合いが目の前で死んでいき、その死体を傍目に生活することの辛さや、先の見えない絶望的な状況の恐ろしさを知ることができました。また、その当時の状況を今度は私たち若い世代が後世に語り継がなければいけないと思いました。

松尾さんのお話を聞いて、一発の核兵器によって失われてしまったものの大きさに気づいた。お話の中で、戦後79年経った今も薬を十数錠飲んでいるということをおっしゃっており、戦争というものは戦時中だけでなく、戦後も人々の心、そして身体に多大な影響を与えるものであることを知った。

（2）室内学習と資料館周辺のフィールドワーク

〈日　時〉8月8日（木）15：25～17：15
〈場　所〉平和会館ホール、原爆資料館周辺
〈内　容〉室内学習では、被爆の実相や戦時下での疑似体験を行い、原爆が与えた被害や自分の大切なものを例えに戦争が起こった時にどのように変化するのか、疑似体験をしました。フィールドワークではピースボランティアの説明で資料館周辺の建造物等の意味などを説明していただきながら、見学しました。



戦争疑似体験の様子

長崎原爆死没者追悼平和祈念館

ピースボランティアの説明

下の川

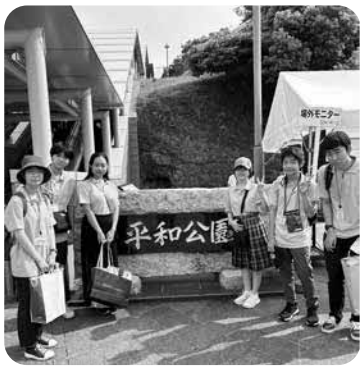
〈参加しての感想〉

戦争疑似体験では、アメリカの戦闘機が日本に来た時、当時の人々は手を使って親指を耳の中に、残りの4本の指で目を覆って、口を開けて頭を低くして、被害をなるべく受けないように工夫をしていたことを知りました。日頃からアメリカの戦闘機が上空に来ることの恐ろしさを感じました。

ピースボランティアの方が最初から最後までとても丁寧に案内をしてくださったおかげで、建物の一つ一つに被爆者への追悼の意が込められていることを知りました。また、今現在世界には9,000を超える原子爆弾がある、というお話や、当時の様子を実際に体験するという時間では、自分の思いとは反対に、大切なものを捨てざるを得ないという状況の理不尽さややるせなさに胸が痛みました。

（3）平和祈念式典

＜日　時＞　8月9日（金）10：40～11：45
＜場　所＞　平和公園内平和祈念像前広場
＜内　容＞　被爆79周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列し、原爆が投下された11時2分には、一斉に黙とうを捧げました。



平和公園前

祈念式典前

平和の泉で千羽鶴を捧げる

〈参加しての感想〉

79年前、その場でたくさんの方が亡くなったとを考えると涙が止まらなかった。これだけ多くの人が平和を願っていても、世界では人を傷つける行為は個人間でも国家間でも続いていて、どうしようもなく悲しく、ただただ亡くなられた方々の冥福を祈るばかりでした。

小学生や高校生たちが歌を歌っていたのが、平和に向けての強い気持ちが伝わってきて、印象に残りました。そして暑い中、高校生や大学生のボランティアの方々が冷たいタオルと水を配ってくれました。若い世代の人たちの平和への願いの強さを感じました。

（4）平和学習（意見交換会）

＜日　時＞　8月9日（金）14：00～16：00
＜場　所＞　出島メッセ長崎
＜内　容＞　12名程度のグループに分かれ（ピースボランティア2名、自治体派遣生10名程度）テーマに沿って意見交換を行いました。
【テーマ（低学年）】ケンカ・戦争の原因はなんだろう？
【テーマ】ケンカ・戦争をなくすには、どうしたらいいかな？（解決策）

グループワークの様子

〈参加しての感想〉

私のグループにはポルトガルから来たが学生が2人いました。外国での原爆や第二次世界大戦の学習について、たくさん話すことができ、とても充実した時間でした。1つ反省点として、私のグループには英語が話せる人がたくさんいたので、英語がマジョリティの言語になり、通訳したり、声をかけてみたりしましたが、英語が苦手な人は意見が出しにくく、社会の縮図のようになってしまったことです。

全国各地の人と意見交換をしたが、一人ひとり平和や核兵器廃絶に向けたアイディアが異なり、議論するのがとても楽しかった。また、色々な人と意見を言い合うことで、今までの自分になかった平和に対する意見や考えを見つけることができ、とても勉強になった。そして、平和のためには解決しなくてはいけない問題がまだまだたくさんあることを実感した。

（5）長崎原爆資料館見学

＜日　時＞　8月9日（金）16：30～18：30
＜場　所＞　長崎原爆資料館
＜内　容＞　被爆資料や被爆の惨状を示す写真などの展示物を見学し、「戦争に至るまでの経緯」や「当時の被害状況」などを学ぶことで、派遣生一人ひとりが戦争の悲惨さを感じ取り、平和に対する意識を改めて強く持ちました。

資料館見学の様子

〈参加しての感想〉

原爆の影響で顔にやけどを負い、顔が真っ赤になっている人の写真や原爆投下までの全ぼうを説明した機械などがありました。それらを見て、心が痛くなると同時に不甲斐なさを感じました。どんなに頑張っても原爆被害者と同じ痛みを感じることはできません。出来ないなりに知る努力をこれからしていきたいです。

資料館を訪れるのは２度目でしたが、今回は中を詳しく見ることができました。原爆がいかにして落とされたか。その規模や被害、実際に爆風や熱にさらされた当時の物の展示など、被害の深刻さがよく分かりました。また、現在核を禁止とする取り組みや核を保持している国の現状など、ポジティブな傾向だけでなく、まだ世界は核による危険をはらんでいる状況にあると知りました。

（6）碑めぐり

＜日　時＞　8月10日（土）9：00～11：00
＜場　所＞　平和公園～山里小学校～如己堂～浦上天主堂
＜内　容＞　長崎平和推進協会所属の平和案内人とともに平和公園～山里小学校～如己堂～浦上天主堂のコースをガイドしてもらいながら見学しました。

長崎の鐘

如己堂

山里小学校裏の防空壕

浦上天主堂

〈参加しての感想〉

平和公園はブラジル連邦共和国や中華人民共和国など様々な国から平和を祈って像が寄贈され、世界中から長崎への想いが込められている場所だと感じました。爆心地近くで亡くなった多くの方々への冥福を祈り作られてた長崎の鐘にたくさんのお花が置かれているのを見て、戦争は昔のことではなく、身近にあるものだと自分事に感じることが大切だなと思いました。

防空壕の跡や、当時病院として使われていた小学校や、被爆した大浦天主堂、永井隆記念館など、今も残る貴重な建物を見て回りました。その中でも永井隆記念館が特に印象に残っています。外国からも多くの人が訪れ、父から娘や息子、そして孫に原爆を忘れまいと、伝えられていたのが心に残りました。

3. 感想文

長崎で感じた平和の重みと平和構築に貢献する使命

会社員　日下　友乃

今回、品川区の長崎平和使節団派遣プログラムに参加し、2泊3日間にわたって長崎の原子爆弾投下の歴史について学び、これからの平和構築について思考を巡らす貴重な体験をしました。以下では、このプログラムの中で特に印象に残った出来事や学び、そして私自身の感じたことをまとめていきたいと思います。

●被爆体験者講話

まず、8月8日に行われた被爆体験者の講話は、非常に心に強く残るものでした。被爆者の方が語った「戦争は二度としないでほしい。核を廃絶するべきだ」という言葉は、深く心に響きました。この言葉は、教科書やニュースで聞くのとは全く異なる重みがあり、当事者であるからこその説得力を感じました。それ以上に大きい気づきとして、私自身、小中高の時に広島の被爆体験を聞いたことがたくさんあるにもかかわらず、その内容をほとんど覚えていない状態に気づいたことです。今回の講話も、時間が経てば忘れてしまうかもしれないという不安を感じましたが、それでもこのような機会が与えるインパクトが、戦争の愚かさを直感的に理解するための土台となると信じています。また、平和学習は一度限りではなく、継続的に行われるべきだと感じました。子どもたちにとっても、大人にとっても、定期的に平和について学び、考える機会が必要だと思います。被爆者の証言をただ聞くだけでなく、その言葉をどのように未来に繋げていくかが重要です。これは、2年前に祖母を亡くした被爆三世としてもとても大きい課題です。

●平和学習

その後の平和学習では、ワークショップ形式で「大切なもの」をカードに書き出す活動がありました。私の手元に残ったのは「縁」「子どもの夢と可能性」「祖母の家の畑で過ごす時間」という、無形のものたちでした。これらの大切なものが戦争によって失われるかもしれないということを考えると、非常に苦しい気持ちになりました。これらは私の生きる源となるものであり、それを失うことは、人生そのものを失うに等しいと感じました。

また、核兵器の数をビー玉で表現するワークショップでは、核兵器の恐ろしさを聴覚的に実感しました。これほど多くの核兵器が存在している現実に直面すると、自分の無力さをひしひしと感じました。

●平和の灯キャンドル作成

キャンドル作成の活動を通して、自分自身が享受している幸せについて考える時間を持ちました。キャンドルに書き込んだキーワードには、「LOVE」「FUN」「Passion」「Freedom」という、自分の人生において大切にしているものを選びました。これらが当たり前ではなく、感謝すべきものだということを改めて実感し、平和の中で過ごす日常のありがたさを深く感じました。戦後復興を支えてくれた多くの人々への感謝の気持ちを忘れずに、これからも平和のために何ができるかを考えていきたいと思います。

●平和祈念式典

8月9日の平和祈念式典は、非常に感情的な時間となりました。79年前、その場で亡くなった多くの方々を思うと、涙が止まりませんでした。平和を願う多くの人々の祈りにもかかわらず、現在も世界各地で争いや紛争

が続いている現実を、非常に悲しく感じました。亡くなられた方々の冥福を祈るばかりでした。

広島と長崎の式典の違いにも興味を持ちました。広島の平和宣言や折り鶴など、私が当たり前だと思っていたプログラムの意図に気づき、平和を考えたり、祈る場の設計の可能性を感じました。

●平和学習と原爆資料館

午後の平和学習では、ポルトガルから来た学生とともに戦争や平和について話し合う時間を持ちました。異なる国からの視点を共有することで、戦争や平和に対する理解が深まり、非常に充実した時間でした。しかし、反省点として、英語が主な言語となってしまい、英語を話せない人たちの意見が出にくくなってしまったことがありました。社会の縮図のようになってしまったように感じ（マジョリティ言語をもつ人たちの声が大きくなる）、多様な意見を取り入れるためには、言語の壁を超えた工夫が必要だと感じました。

また、原爆資料館では、カトリック信仰が長崎に深く根付いていることが印象的でした。被爆した教会の遺品が展示されており、広島とは異なる宗教的な背景が戦争や原爆の影響にどのように反映されているのかを考えさせられました。

●平和案内人のガイド

防空壕や各国からのモニュメントを見学し、戦争の悲惨さを再認識すると同時に、平和への願いが込められたモニュメントの存在が心に残りました。特にチェコスロバキアのモニュメントは、平和的に分離した歴史や、広島の原爆ドーム設計に関与したチェコ人建築家の存在が思い出され、印象的でした。

●まとめと今後の取り組み

今回のプログラムを通して、被爆者の方々が願う「戦争はしない」「核兵器を廃絶する」というメッセージを広く伝えていくことの重要性を改めて感じました。また、平和に対する対話の場を増やし、より多くの人々が自分の言葉で平和について語る機会を作ることが、未来の平和構築に繋がると確信しました。

私自身、平和に貢献するためにできることを考え続け、自分の人生の中で平和を大切にしていきたいと思います。平和は日々の生活の中で育まれるものであり、自分自身を大切にし、他者に優しさを持って接することがその第一歩です。これからも、平和について考える機会を持ち続け、多くの人を巻き込んで、共に、平和な未来を築いていきたいと思います。

「原爆投下から 79 年後立った今」

獨協大学外国語学部英語学科 1 年
石田　健悟

僕は今回の長崎平和派遣に行く前、戦争や原爆に対しては小学校中学校高校と学校の授業内で教科書や資料を使用し学習したため戦争の概要は理解していました。しかし、実際に広島や長崎にいって戦時中の状況や人々の生活について学んだことはなかったため、あまり戦争がおきたことに対する実感がありませんでした。

実際に長崎に行ってみて僕が戦争や原爆の悲惨さを実感したのは、事前学習の際にご自身のお母さまが被ばくされた澤原さんのお話をきいたときでした。澤原さんのお話の中では、戦争そして原爆によって澤原さんの周りの方の生活が一変してしまったこと、そして澤原さんの家庭が壊されてしまったことをお話していただきました。澤原さんのお話の中で最も印象に残っていることは、「今生きている人々が過去の過ちを見直す。」ことでした。これは戦争では暴力や争いによって解決しようとしたがそうではなく今後は話し合いによって争いを解決しろということでした。このことは、国単位の大きなものだけではな

く人同士のいざこざやケンカについても同じことがいえると思います。そして小さい争いの積み重ねが大きな対立につながると思います。そのため、私たちも日常生活のなかで対立しそうになったら澤原さんのお言葉を思い出し話し合いで解決することを意識するべきだと感じました。

原爆や戦争の悲惨さについて感じたのはこれだけではありません。長崎資料館に訪れた際も強く感じることができました。資料館では、原爆熱線によってやけた人々の写真や原爆によって一瞬で更地となったナガサキの様子を見ることができました、原爆は人々の命はもちろん、今まであったナガサキの町の歴史や文化、長らく築き上げた人々の歩みをも消し去る恐ろしい兵器であること再認識いたしました。

ピースフォーラムや、平和祈念式典へ参加した際はこれからの日本、世界を築き上げていくものとして、世界平和や核兵器根絶に対して深く考えさせられることとなりました。平和祈念式典では、岸田前総理や長崎市長がお言葉を述べられました。その中でも、鈴木市長の「平和をつくる人々よ！１人ひとりは微力であっても、無力ではありません」という言葉が特に印象に残りました。今ウクライナや中東など遠く離れた場所で戦争が起きているのはニュースでみると自分には関係ないと派遣前は思っていました。しかし、鈴木市長がおっしゃっていたとおり、たとえ遠く離れていても、戦争について友達と考える時間があったり家族と考えてみたり、コンビニで募金したり、今回みたいに平和派遣に参加したり簡単なことでも少しでも戦争に関心を持つことは大切だと思いますし今後自分も周りの人々を巻き込んでやっていきたいです。ピースフォーラムでは、10 人ほどのグループに分かれて戦争について話し合いました。自分のグループには沖縄や東京そして長崎など全国いろいろな場所から集まっていました。話し合いの中で、長崎や沖縄出身の人は、原爆を落とされた長崎と第二次世界大戦の際地上戦があった沖縄出身だったため我々東京で生まれ育った人間とは戦争に対する意識や教育に差異があったことに気づきました。長崎出身の子は小学生の時授業で実際に原爆によって被害を受けた場所に行くことや戦争や原爆に関する授業の頻度が多いことを知りました。そのせいか我々東京育ちの人間に比べ、戦争や核兵器に対する知識量や関心がとても高いことに気が付きました。唯一の被爆国である地に住む日本人として戦争に対して全国民がもっと関心を寄せるべきでありそのため、長崎や沖縄だけではなく全国各地でもっと戦争に関する授業を増やすべきだと感じました。

最後に、原爆投下から 79 年経過した現在では、実際に戦争を経験した方がどんどん少なくなっており、後世に伝える人間が減ってきていると思います。また、戦争から月日が経ち我々 10 ～ 20 代の若い世代にとって戦争ははるか昔のことで、戦争について考える機会が減り、原爆や戦争の詳しいことに関して全く知らない人たちも増えてきているのではないかと思います。そういう状況の今だからこそもっと多くの人が戦争についてしっかりと学ぶべきだと思います。そのために今回経験したことを友人や学校の同級生などの自分の身の回りの人々に伝えていくことや将来自分に子供ができた際、自分の子供にも戦争や原爆について正しく伝えていきたいです。

平和の答え

立教池袋中学校２年　松尾　航大

私は去年、この派遣事業に参加したことがあった。しかし、その時は長崎に行けなかったものの、戦争の過ちや平和の尊さを発信す

るべきだと考えることができた。だから、今回参加してもその考えはあまり変わらないだろうと思っていた。しかし、今回は実際に長崎に行ってみてその考え方が一変しました。

私は一日目に飛行機に乗って長崎へ行った。飛行機では映画を見て、楽しんでいて、どこか旅行気分でいたのかもしれない。長崎につくと、バスに乗ってホテルに荷物を置いて　長崎市平和会館に向かいました。そこでは、松尾幸子さん（当時 11 歳）という方が被爆体験講話をしてくれました。その話は戦争当時における子供の生活がとてもよく分かりました。松尾さんの周りでは自分の肉親がたくさん死んでいきます。また、何のせずただただ死を待つような顔をしている人は、1回も治療を受けられていませんでした。苦しんでいる人を見ても幼い松尾さんは何もしてあげられませんでした。そのことをとても悔やんでいました。それを聞いて心が張り裂けそうになったのと同時に、自分が旅行気分でいたのをとても愚かに思えました。

二日目は、平和祈念式典に参列しました。テレビでも見たこともあり、概ねの流れは事前に把握していました。また、会場にはたくさんの来賓者を予想していました。しかし、実際はテレビで見る時よりも遥かに大勢の人を目の当たりにして、僕はこう思いました。「日本中の人が長崎の平和について前向きな気持ちなのだな。」と。そして、会場で配られたプログラムを見てみると英語で書かれたものが幾つもありました。その時私は大きな思い違いに気が付きました。それは現在、世界では英語を公用語として扱う国が多いため、多くの国にこの式典で何をしているのかを知ってもらうために翻訳されていると。そして、日本だけでなく世界中の人々が平和や戦争に対して関心を寄せているのだ。そして、私はこの式典を通して、より多くの人々に原爆や戦争により、たくさんの命が奪われたこと、平和でいることがどれほど美しいことなのかを知ってほしいと願うことができました。

三日目は、ガイドの黒板美由紀さんとともに、碑めぐりに行きました。碑めぐりでは、平和公園→山里小学校原爆資料室→永井隆記念館→浦上天主堂（再現）に行きました。平和公園にはたくさんの像がありました。それらの像は世界各国から平和を願い日本に送られています。そういうところでも世界が平和を実現しようとする努力が見えてきます。また、長崎の鐘というものがあり、それは戦時中に中学生や女学生をはじめ、多くの人が働いていて、そこで亡くなった人々の冥福を祈るために作られました。それを知って、今、私たちが強制的に働かされていないこと、重労働を罰する法律があることがどれだけの人々を幸福にできるのかを思い知りました。当時を考えると心が痛くなりました。山里小学校原爆資料室には原爆の影響で一瞬にして焼けてざらざらになった屋根瓦がありました。それを見るだけでも原爆の恐ろしさが蘇ってきそうでした。原爆資料室の隣にある、防空壕は一見、外から見ると広くなっていて暮らせそうな気がします。しかし、山里小学校の生徒全員がそれに入って、空襲が終わるのをいつまでもいつまでも待つとなると、窮屈で仕方がなく、いつまでも終わらない恐怖にかられることはどれだけの悲しみを生むのでしょうか。それは私には分かりません。それでも私はもっと多くのことについて知ろうと努力し続けます。

永井隆記念館は、永井隆の人生がそこにはありました。永井隆の人生はとても過酷でした。彼は医者になって、放射線の医学の研究を進めていく中で自身は白血病に侵され、余命 3 年と告げられる。原爆で重傷を負ったにも関わらず原子病の研究や治療に専念しました。そして、死ぬまで平和を訴え続けまし

た。それを聞き私は涙があふれそうになりました。彼のおかげで何人の命が救われただろう。どうしてけがを負ったのにも関わらず、いばらの道を突き進めることができるのだろう。彼の献身的な努力の全貌を知るにはもっと見聞が必要だと思いました。

最後の浦上天主堂は再建築され外見は堂々していました。でも中に入ると、とても重い雰囲気でした。様々な深い感情によってこの建物が作られているとさえ想像させられました。壁しか残らなかった浦上天主堂が再現とはいえ、重たい緊張感があります。目をつぶれば、これを建築した人はどんな想いがあったのか、竣工したとき、人々はどんなリアクションだったのか等、頭を巡りました。私は去るときに、「よかったな。」と一言残して、帰りました。この派遣で、平和の尊さや戦争の悲惨さを伝えて、伝えた人の心を動かすことが大事。という考えに至りました。

最後に、品川区役所の中村さん、鈴ヶ森中学校の平井先生、長崎までの引率ありがとうございました。

「原爆という歴史を忘れないためにできること」

郁文館グローバル高等学校３年　相馬　桃香

私が今回この活動に参加したきっかけは、高校２年次のニュージーランド留学でした。私の学校は授業の一環として10ヶ月間の留学があり、SDGs教育にも力を入れているため、戦争や原爆などに対して、自分は十分な知識を持っていると自負していました。しかし、現地校で歴史の授業を取った際、現地の生徒と原爆について話し合う中で、現地の生徒は原爆を単なる歴史の一つとして捉えており、日本人のようには深刻に捉えていないことに衝撃を受け、同時に核兵器に対する危機感の薄さに不安を覚えました。また、これは日本人にとっても同様なのではないかと考えました。広島や長崎に住む学生は、平和祈念式典や講話など、原爆の話題に触れる機会が多くあると思いますが、それ以外の地域では社会の授業で少し習う程度で、十分な知識があるとは思えないと感じました。そして、私自身も原爆のことについて、他者に詳しく説明できるほどではないと気づき、ニュージーランドに住む現地の生徒と同じレベルなのではないかとハッとしました。そのため、平和を維持していくために、私自身が今後どのような行動ができるのかを、この平和使節団の活動や被爆者の方のお話を通して考えたいと思い、参加しました。

そこで私は、事前学習として外国人の原爆に対する考えを調べました。広島と長崎に原爆を落としたアメリカや、日本の統治下や占領下にあったアジアの国々は、日本の原爆に対して「原爆が戦争を終わらせ、結果として支配下にあった多くの人の命を救い、解放した。」という考え方を半数以上が持っていることがわかりました。また、ニュージーランドでは、2013年に国立戦争博物館に原爆の写真が展示されたことがありましたが、原爆を正当化する意見が多くあったそうです。総じて海外では国によって原爆の捉え方が異なることがわかりました。そして、NHKが戦後70年に行った世論調査では、原爆投下の日を答えられた日本人は、広島や長崎に住む人でも70%を下回っていたそうです。これらのことを踏まえて、私は日本人が原爆に対して十分な知識と理解を持ち、国内外を問わずに歴史や実態を継承していかなければならないと感じました。

今回の青少年ピースフォーラムでは、多くのことを学ぶことができましたが、その中でも被爆者の方の講話がとても印象に強く残っています。お話ししてくださった方は、幼い頃に被爆して家族を亡くし、今も放射線によ

る後遺症を患っています。当時は街を歩くと、焼けた死体や、何の傷もない死体がゴロゴロと転がっており、埋葬することもできず、腐敗していく様を見ていたようです。また、原爆が投下されたその後の食糧不足や家族の怪我の様子など、教科書では知り得ない生々しい原爆の悲惨な実態を教えてくださいました。また、「1日でも早く核を廃止してほしい。」「愚かな戦争を二度としないために、核兵器の怖さを語り続け、反対の声を上げることが大切だ。」と、何度も何度も強く訴えられていました。

この活動に参加するまで私は、原爆という悲惨な歴史や事実を知ることを恐れ、避けてきました。しかし、この講話を聞いて私は、ただ原爆の歴史を調べ、そこから得たことを知識として終わらせるのではなく、人に伝えていくことが大切なのだと気付かされ、原爆という歴史を見て見ぬふりをせず、しっかりと向き合わなければいけないということを学びました。以上のことから、私が今できることとして、学校などの教育機関で原爆について生徒全体で学び、話し合う場を設けることが必要なのではないかと考えました。いつか核が使われたという当時の歴史を知る人が一人もいなくなってしまったとき、人々から原爆の恐ろしさや悲惨さといった歴史が廃れ、核兵器を再び使用してしまう可能性があります。そのため、若い世代である私たちが、核の怖さを今一度学び、後世に語り継いで、絶対に忘れてはいけない・忘れないようにし続けていくことが重要であると考えます。加えて、この活動に参加する前の私のように、自分から原爆や核兵器について知ることはかなり勇気が必要です。しかし、例えば学校教育において、原爆に関しての学びを全体で取り組むことによって、自分から原爆のことについて学びだすきっかけになると思います。

また、唯一の被爆国として、日本国内だけでなく、原爆の実態を海外にも伝えていくこともちろんのこと大事だと考えます。海外では、戦争や紛争が再び起こり、核兵器が使われるのではないかという懸念があります。このことからも、被爆者のお話を日本だけでなく海外でもする必要があると感じました。また、今後大学生になるにあたって、留学で培った英会話能力を活かし、多くの留学生と原爆や核兵器について討論したり、原爆の脅威を詳細に伝えたいと考えています。日本が核兵器という脅威を取り除くための先駆者となれるよう、まずは自分の周囲から、そしていずれは海外で語り伝え、平和を維持することに少しでも貢献したいです。

「長崎平和使節派遣」

八潮学園　8年　福田るのん

私が原爆について知ったきっかけは、小学校の国語の授業で読んだ「ちいちゃんのかげおくり」という物語でした。それを読んだ後、原爆や戦争について興味が湧き、家族と戦争について話をしました。「どうしてこんなに戦争は残酷なのだろうか。」「大勢の人を一発の原子爆弾で殺して、誰が得するのだろうか。」と考えるようになりました。夏休みにふと品川ケーブルテレビを見ていた時に、長崎の平和記念式典で黙祷を捧げている中学生の姿を目にし、私も実際現場に行って、長崎について知り、黙祷を捧げたいと思いました。そして長崎平和使節派遣に応募しました。

1日目の活動で私が特に印象に残っているのは、被爆者体験講話です。被爆者の方たちは、家族や友達ともバラバラになったり、満足に食事をとれなかったりと精神的にも身体的にもとても傷つけられました。原爆投下後の生活も放射能の後遺症だったり、差別を受けたりなどとてもつらいものだったと伺いました。このお話を聞いて、私は「多くの人が

心も体も傷つけられる戦争は、もう二度としてはいけない」と思いました。また、原子爆弾の威力は長崎の方が大きかったけれど、広島の方が被害は大きかったということを知り、意外に感じました。地理的な要因だそうです。フィールドワークでは、約 20 万人の長崎の亡くなった方々の記録が国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館に残されているということを知りました。このように形にしっかりと残し、これからに引き継ぐ強い思いが印象に残りました。キャンドル絵付けでは、平和を祈るデザインを各々考えました。そこで私は、雨が降った後のきれいな空にある虹を描きました。

2 日目は平和記念式典に参加をしました。式典の前には派遣生で折った千羽鶴を捧げてきました。他の団体も千羽鶴をたくさん捧げていて、その数に圧倒されました。式典以外の日でも長崎市の各地に、地元や世界中の人々からの千羽鶴が捧げられるそうです。平和記念式典は、平和記念像の前で行われました。右手は原爆を、左手は平和を、顔は犠牲者の冥福を祈るという意味が込められている像です。長崎の人々の強い思いが詰まっている像なのだと感じました。式典では小学生や高校生が歌を歌い、そこからも平和に向けての強い気持ちが伝わってきて大変心に残りました。

3 日目は碑めぐりで、平和公園、山里小学校原爆資料館、永井隆記念館、浦上天主堂をガイドさんの説明を聞きながら周りました。平和公園には、ブラジルや中国など 16 ヵ国から平和を祈って像が寄贈されています。世界中からの長崎への思いが込められている場所だと感じました。また爆心地付近で、亡くなった多くの方々への冥福を祈り作られた長崎の鐘を見ました。そこにはたくさんのお花が置かれているのが印象に残りました。

3 日間を通して、多くのことを学び、感じました。戦争は昔のことではない。普段から身近にあるものとして、自分事として感じることがとても大切だと思いました。

平和への第一歩

荏原第五中学校 8 年　桐生　一花

1945 年 8 月 9 日 11 時 02 分長崎の街に突如落とされたたった一つの爆弾。たった一発の原子爆弾が一瞬にして街を廃墟にし、多くの尊い生命を奪った。生き残った人々は今もなお心と体に負った生涯いえぬ傷に苦しみ続けている。

私は、8 月 8 日から 10 日の 3 日間長崎平和使節派遣に行き、原爆の悲惨さや平和を祈る思いの強さを改めて知ることができた。

「太陽が落ちてきた」平和祈念式典で三瀬さんはそう語ってた。実際に原爆が落とされた際の地上の温度は爆心地でおよそ 3000 ～ 4000 度､1 キロ離れたところで 1000 度あったという。鉄が溶ける温度が約 1000 度、太陽の温度が約 6000 度である。これに並ぶ暑さは一体どれほどのものなのだろうか。これほどの熱を発し、多くの人の命を奪った原子爆弾の悲惨さは簡単に想像することはできなかった。

今回、長崎平和使節派遣へと私が行こうと思った理由は、長崎も広島同様原爆を落とされ、甚大な被害を負っている。それにもかかわらず、広島と比べ、原爆が落とされたという事実さえ知られていないことが多い。その現状を知り、もっとこの事実をひろめていきたいと思ったからだ。

長崎に行くまでに、2 回にわたる事前学習があった。そこで被害二世の方の話を聞いた。今回お話をしてくださった被爆二世の方や現地でお話ししてくださった被爆者の方は皆、恨みや怒りはない。と落とされた当初はあったが怒りや恨みが生み出すものは新たな

争いのみだ。もう二度と争いをしたくはない。と言っていた。被爆した方、被爆二世の方など今もなお原爆の影響で苦しんでいる方々はきっと原爆や原爆を落としてきたアメリカのことを恨んでいるのだろう。と考えていた私はそれを聞き、とても驚いた。

原爆の被害やかつての人々の想い今まで知識としてしか知らなかったが現地に行き、実際に自分の目で確かめることで、今まで知り得なかったことや、人々の思いをより鮮明に感じ取ることができた。長崎に着き、私ははじめ、自然豊かな街並み、日本人、外国人問わず多くの観光客に溢れる綺麗な街並みにほんとにここに原爆が落とされたとは思えないほどだった。だが、被爆者講話や原爆資料館、祈念式典、碑めぐりなどを通して、ここまで復興するまでの苦労、被爆した方々の想いなどを学び、この綺麗な景色はたくさんの人の努力の上にある、かけがえのないものなのだと気づくことが出来た。

この 3 日間、様々な経験をしたが、最も印象に残っていることは平和祈念式典での、一人ひとりは微力であっても無力ではありません。という言葉だ。現在、地球上には推定 12120 発の核弾頭が存在すると言われており、世界においては核兵器の使用が示唆されるなど、一触即発の緊張が続いている。また、核爆弾は使われていなくとも戦争はずっと続いている。今この瞬間もいつ襲ってくるかわからない恐怖のもとで過ごしている人々がいる。いつかの平和を目指して私たちにできることは何があるだろうか。と考えた時、今回、お話をしてくださった方々の言葉が脳裏に浮かんだ。" 平和のために私たちができること、それは話し合いだ。" 話をしてくださった方は皆、口を揃えそう言っていた。怒りや憎しみからうまれるものは新たな争いのみなのだ。どんな相手だろうと、根気強く話し合いを続けることが微力な私たちにできる平和への第一歩なのだ。話し合いの輪がいつか国境や宗教、人種、性別、世代の違いをも超え、世界をつなぐと信じて。もう二度と原爆の悲劇を起こさないために、いつか戦争のない、理不尽な暴力に傷つげられる人々のいない、平和な世界を目指し、微力な私は身近なところから話し合いを大切に生きていきたい。

4. 派遣をふり返って

平和使節派遣に参加しての感想

〈桐生　一花〉

平和使節派遣に参加したことで、平和の重要性をより感じました。長崎は過去に原爆の悲劇を経験し、今も後遺症等で苦しむ人が多くいる。原爆を過去のものと風化させることなく、原爆の悲劇を語り続け決して過去のものではない。他人事でなはい。と思いました。長崎の未来に向け平和を築いていこうという強い意志に強く感銘を受けました。特に被爆者の方の話を直接聞き、戦争、原爆が与える影響の強さに衝撃を覚えました。同時にこの先もこうした歴史を伝えていくことの重要さを感じました。貴重な経験ができた。

〈福田　るのん〉

私は、広島と長崎の原爆の違いに興味を持ち応募しました。現場に行き被爆者やその関係者の方々、長崎原爆資料館などの見学を通して、長崎の受けた原爆の恐ろしさ、広島との違いについて知ることができました。平和に向けて戦争を二度としないように戦争の恐ろしさをこれからの世代に伝えていきたいと思いました。

参加以前、以後で変わった考えなどはありますか？

〈石田　健悟〉

原爆資料館で実際に当時の写真を見たこと。そして被爆者の方々に話を聞くことによって、戦争や核が割と身近な場所にあることに気がついた。また、資料館や町で多くの外国人の方がいらっしゃっており、1945 年 8 月 6 日と 9 日に原子爆弾が落とされたことが日本人だけでなく世界の人々にとっても大きな関心ごとであることに実際の長崎を訪れてみて気がつきました。

〈相馬　桃香〉

原爆についての自分の中での受け止め方が変わったと考えます。以前は「原爆」と聞くと、悲惨な光景や被爆者の悲痛な声を想像し、会話や平和祈念式典でさえも避ける傾向にありました。しかし、今回の参加を通じて、辛いものだったと避け続けるのではなく、平和の中に生きる一人の人として、向き合わなければいけないのだと強く思いました。目をそらさずに現状や事実を見る必要があると、今は考えています。

今回の派遣を経験し、これから伝えていきたいことはなんですか？

〈日下　友乃〉

被爆者の方の思いである「戦争はしない」「核兵器を廃絶する」この２点はぜひ伝えていきたいと思っています。それに加え、長崎ピースフォーラムという機会があることを学生の人たちに伝え、この機会がより多くの人に開かれる場になればいいと思いました。恥ずかしくて平和について普段は語れな子どもたちがいると思います。でも言葉には力があり、言葉に出すことで平和に対するモチベーションが高まり、気持ちや考えを行動に移す勢いになると思います。なので、このような場所があることをぜひ伝えていきたいです。

〈松尾　航大〉

これからはただ伝えるだけでなく、伝えた人を動かす力が必要です。そのために伝えた人の記憶に残るような話をしていかなければならない。そのためには写真や図を活用して説明していくことが必要になってくる。そのため、今後は写真や図を活用して「戦争はおろかな人と人がぶつかって、何も良いことがなく、ただただ人に悲しみや絶望を永遠に残し続けるもの。」ということを色々な人に伝えて、伝えた人の記憶に一生残り、影響力の強いものにしていきたいと思います。

これから自分たちにできることはなんですか？

〈日下　友乃〉

まずは自分を大切にすることです。私は自分の気持ちに正直に向き合えず辛い時期がありました。人に優しくできず、それがさらに自分を苦しめました。人を大切にするためにまずは自分を大切にする。人に幸せを分けるために、自分の中に幸せをためること。それが私が毎日できることだと思います。また、長崎ピースフォーラムのような平和に関する対話をする場所を増やしたり、より開かれた場所にしていきたいと思いました。子どもたちには時間と可能性があると思います。大人がお金と機会を作れば、それらを育てることができると思います。今回が一回きりにならないように、継続的に平和貢献できる場を作っていけたら理想だと思います。

〈桐生　一花〉

他の人にも知ってもらえるよう話すこと。話し合いを心がけること。他人事と思わず目を向けること。知ろうとすること。今ある当たり前なことにたまにでも感謝をすること。このようなことがあったと決して忘れないこと。偏見で物事を決めつけないこと。様々な価値観に触れ、視野を広げる。

第３部　資料編

広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式
HIROSHIMA　PEACE　MEMORIAL　CEREMONY

令和６年(2024年)８月６日

August 6, 2024

広　　島　　市

The City of Hiroshima

式 次 第

Program

開　　式	8：00	**Opening**
原爆死没者名簿奉納 広島市長 遺族代表	8：00	**Dedication of the Register of the Names of the Fallen Atomic Bomb Victims** Mayor of Hiroshima Representatives of the bereaved families
式　　辞 広島市議会議長	8：03	**Address** Chairperson of the Hiroshima City Council
献　　花 広島市長 広島市議会議長 遺族代表・こども代表 被爆者代表 来　賓	8：08	**Dedication of Flowers** Mayor of Hiroshima Chairperson of the Hiroshima City Council Representatives of the bereaved families and children Representatives of the atomic bomb survivors Distinguished guests
黙とう・平和の鐘	8：15	**Silent Prayer and Peace Bell**
平和宣言 広島市長	8：16	**Peace Declaration** Mayor of Hiroshima
放　　鳩		**Release of Doves**
平和への誓い こども代表	8：24	**Commitment to Peace** Children's representatives
あいさつ 内閣総理大臣 広島県知事 国際連合事務総長	8：29	**Addresses** Prime Minister of Japan Governor of Hiroshima Secretary General of the United Nations
ひろしま平和の歌（合唱）	8：46	**Hiroshima Peace Song (chorus)**
閉　　式	8：50	**Closing**

平　和　宣　言

皆さん、自国の安全保障のためには核戦力の強化が必要だという考え方をどう思われますか。また、他国より優位に立ち続けるために繰り広げられている軍備拡大競争についてどう思いますか。ロシアによるウクライナ侵攻の長期化やイスラエル・パレスチナ情勢の悪化により、罪もない多くの人々の命や日常生活が奪われています。こうした世界情勢は、国家間の疑心暗鬼をますます深め、世論において、国際問題を解決するためには拒否すべき武力に頼らざるを得ないという考えが強まっていないでしょうか。こうした状況の中で市民社会の安全・安心を保つことができますか。不可能ではないでしょうか。

平和記念資料館を通して望む原爆死没者慰霊碑、そこで祈りを捧げる人々の視線の先にある原爆ドーム、これらを南北の軸線上に配置したここ平和記念公園は、施行から今日で75年を迎える広島平和記念都市建設法を基に、広島市民を始めとする平和を願う多くの人々によって創られ、犠牲者を慰霊し、平和を思い、語り合い、誓い合う場となっています。

戦後、我が国が平和憲法をないがしろにし、軍備の増強に注力していたとしたら、現在の平和都市広島は実現していなかったのです。この地に立てば、平和を愛する世界中の人々の公正と信義を信頼し、再び戦争の惨禍が起こることのないようにするという先人の決意を感じることができるはずです。

また、そうした決意の下でヒロシマの心を発信し続けた被爆者がいました。「私たちは、いまこそ、過去の憎しみを乗り越え、人種、国境の別なく連帯し、不信を信頼へ、憎悪を和解へ、分裂を融和へと、歴史の潮流を転換させなければなりません。」これは、全身焼けただれた母親のそばで、皮膚がむけて赤身が出ている赤ん坊、内臓が破裂して地面に出ている死体…生き地獄さながらの光景を目の当たりにした当時14歳の男性の平和への願いです。

1989年、民主化に向けた市民運動の高まりによって、東西冷戦の象徴だったベルリンの壁が崩壊しました。かつてゴルバチョフ元大統領は、「われわれには平和が必要であり、軍備競争を停止し、核の恐怖を止め、核兵器を根絶し、地域紛争の政治的解決を執拗に追求する」という決意を表明し、レーガン元大統領との対話を行うことで共に冷戦を終結に導き、米ソ間の戦略兵器削減条約の締結を実現しました。このことは、為政者が断固とした決意で対話をするならば、危機的な状況を打破できることを示しています。

皆さん、混迷を極めている世界情勢をただ悲観するのではなく、こうした先人たちと同様に決意し、希望を胸に心を一つにして行動を起こしましょう。そうすれば、核抑止力に依存する為政者に政策転換を促すことができるはずです。必ずできます。

争いを生み出す疑心暗鬼を消し去るために、今こそ市民社会が起こすべき行動は、他者を思いやる気持ちを持って交流し対話することで「信頼の輪」を育み、日常生活の中で実感できる「安心の輪」を、国境を越えて広めていくことです。そこで重要になるのは、音楽や美術、スポーツなどを通じた交流によって他者の経験や価値観を共有し、共感し合うことです。こうした活動を通じて「平和文化」を共有できる世界を創っていきましょう。特に次代を担う若い世代の皆さんには、広島を訪れ、この地で感じたことを心に留め、幅広い年代の人たちと「友好の輪」を創り、今自分たちにできることは何かを考え、共に行動し、「希望の輪」を広げていただきたい。広島市は、世界166か国・地域の8,400を超える平和首長会議の加盟都市と共に、市民社会の行動を後押しし、平和意識の醸成に一層取り組んでいきます。

昨年度、平和記念資料館には世界中から過去最多となる約198万人の人が訪れました。これは、かつてないほど、被爆地広島への関心、平和への意識が高まっていることの証しとも言えます。世界の為政者には、広島を訪れ、そうした市民社会の思いを共有していただきたい。そして、被爆の実相を深く理解し、被爆者の「こんな思いは他の誰にもさせてはならない」という平和への願いを受け止め、核兵器廃絶へのゆるぎない決意を、この地から発信していただきたい。

ＮＰＴ（核兵器不拡散条約）再検討会議が過去２回続けて最終文書を採択できなかったことは、各国の核兵器を巡る考え方に大きな隔たりがあるという厳しい現実を突き付けています。同条約を国際的な核軍縮・不拡散体制の礎石として重視する日本政府には、各国が立場を超えて建設的な対話を重ね、信頼関係を築くことができるよう強いリーダーシップを発揮していただきたい。さらに、核兵器のない世界の実現に向けた現実的な取組として、まずは来年３月に開催される核兵器禁止条約の第３回締約国会議にオブザーバー参加し、一刻も早く締約国となっていただきたい。また、平均年齢が85歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、様々な苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩に寄り添い、在外被爆者を含む被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆79周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、改めて被爆者の懸命な努力を受け止め、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に力を尽くすことを誓います。皆さん、希望を胸に、広島と共に明日の平和への一歩を踏み出しましょう。

令和６年（2024年）８月６日

広島市長　松　井　一　實

平和への誓い

目を閉じて想像してください。
緑豊かで美しいまち。人でにぎわう商店街。まちにあふれるたくさんの笑顔。
79年前の広島には、今と変わらない色鮮やかな日常がありました。

昭和20年（1945年）８月６日　午前８時15分。
「ドーン！」という鼓膜が破れるほどの大きな音。
立ち昇る黒味がかった朱色の雲。
人も草木も焼かれ、助けを求める声と絶望の涙で、まちは埋め尽くされました。
ある被爆者は言います。あの時の広島は「地獄」だったと。
原子爆弾は、色鮮やかな日常を奪い、広島を灰色の世界へと変えてしまったのです。

被爆者である私の曾祖母は、当時の様子を語ろうとはしませんでした。
言葉にすることさえつらく悲しい記憶は、79年経った今でも多くの被爆者を苦しめ続けています。

今もなお、世界では戦争が続いています。
79年前と同じように、生きたくても生きることができなかった人たち、
明日を共に過ごすはずだった人を失った人たちが、この世界のどこかにいるのです。
本当にこのままでよいのでしょうか。

願うだけでは、平和はおとずれません。
色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです。

一人一人が相手の話をよく聞くこと。
「違い」を「良さ」と捉え、自分の考えを見直すこと。
仲間と協力し、一つのことを成し遂げること。
私たちにもできる平和への一歩です。

さあ、ヒロシマを共に学び、感じましょう。
平和記念資料館を見学し、被爆者の言葉に触れてください。
そして、家族や友達と平和の尊さや命の重みについて語り合いましょう。

世界を変える平和への一歩を今、踏み出します。

令和６年（2024年）８月６日

こども代表
広島市立祇園小学校６年　加藤（かとう）　晶（あきら）
広島市立八幡東小学校６年　石丸（いしまる）　優斗（ゆうと）

Commitment to Peace

August 6, 2024

Close your eyes and imagine:
a beautiful city of verdant green, a shopping street full of people, smiling faces across the town.
Hiroshima 79 years ago was filled with people living colorful day-to-day lives, much like today.

On 8:15 am on August 6, 1945,
there was a great, eardrum-splitting roar
and a vermillion cloud tinged with black rose into the sky.
People and plants alike were blackened in the blaze and the city was drowned in cries for help and tears of despair.
In the words of one *hibakusha*, Hiroshima on that day was hell on earth.
The atomic bomb stole the color from their lives and turned Hiroshima into a world of ash gray.

My great grandmother was a *hibakusha*, but she never spoke of that day.
Sorrowful memories, too painful to put into words, still continue to torment many of the *hibakusha* today, 79 years later.

Even now, wars continue to plague the planet.
Around the world, those who didn't want to die are dying,
and people are losing loved ones who were supposed to be there with them day after day,
much the same as it was 79 years ago.
Is there really no other way?

Peace will not come from prayers alone.
It is up to us to protect our colorful day-to-day lives and build peace.

Listening carefully to others,
viewing differences as a good thing and reconsidering your perspective,
cooperating with friends to accomplish a goal:
these are all steps that each of us can take toward peace.

Now is the time for us to learn about and experience Hiroshima together.
Visit the Peace Memorial Museum, listen to the words of the *hibakusha*,
and discuss the preciousness of peace and the importance of life with family and friends.

Here, we take one step forward to world-changing peace.

Children's Representatives:
Kato Akira　(6th year, Hiroshima City Gion Elementary School)
Ishimaru Yuto (6th year, Hiroshima City Yahata-Higashi Elementary School)

令和６年８月９日
August 9, 2024

被爆 79 周年
長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

The 79th Nagasaki Peace Ceremony

式次第		Program
開　　式	１０：４５	Commencement
原爆死没者名奉安	１０：４６	Laying to rest of the list of victims who died during the past year
式　　辞	１０：４８	Opening Address
献　　水	１０：５２	Water offering
献　　花	１０：５４	Flower offering
黙　と　う	１１：０２	Silent prayer
長崎平和宣言	１１：０３	Nagasaki Peace Declaration
平和への誓い	１１：１２	Pledge for Peace
児童合唱	１１：１９	Children's chorus
来賓挨拶	１１：２４	Addresses
合唱　千羽鶴	１１：４０	Chorus "A Thousand Paper Cranes"
閉　　式	１１：４５	Closing words

目　　次

会場案内図…… 1ページ
司会者名…… 2
献水の採水場所…… 2
原爆死没者名簿登載者数…… 2
式　　辞…… 3～4
長崎平和宣言…… 5～8
平和への誓い…… 9～10ページ
児童合唱…… 11
千羽鶴（歌）…… 12
長崎市民平和憲章…… 13～14
長崎平和宣言<ことばの解説>… 15～18
平和祈念式典会場周辺図…… 19

長　崎　市
City of Nagasaki

長崎平和宣言

原爆を作る人々よ！
しばし手を休め　眼をとじ給え
昭和二十年八月九日！
あなた方が作った　原爆で
幾万の尊い生命が奪われ
家　財産が一瞬にして無に帰し
平和な家庭が破壊しつくされたのだ
残された者は
無から起(た)ち上がらねばならぬ
血みどろな生活への苦しい道と
明日をも知れぬ〝原子病〟の不安と
そして肉親を失った無限の悲しみが
いついつまでも尾をひいて行く

これは23歳で被爆し、原爆症と闘いながらも原爆の悲惨さを訴えた長崎の詩人・福田須磨子さんが綴った詩です。

家族や友人を失った深い悲しみ、体に残された傷跡、長い年月を経ても細胞を蝕み続け、様々な病気を引き起こす放射線による影響、被爆者であるが故の差別や生活苦。原爆は被爆直後だけでなく、生涯にわたり被爆者を苦しめています。

それでも被爆者は、「世界中の誰にも、二度と同じ体験をさせない」との強い決意で、苦難とともに生き抜いた自らの体験を語り続けているのです。

被爆から79年。私たち人類は、「核兵器を使ってはならない」という人道上の規範を守り抜いてきました。しかし、実際に戦場で使うことを想定した核兵器の開発や配備が進むなど、核戦力の増強は加速しています。

ロシアのウクライナ侵攻に終わりが見えず、中東での武力紛争の拡大が懸念される中、これまで守られてきた重要な規範が失われるかもしれない。私たちはそんな危機的な事態に直面しているのです。

福田さんは詩の最後で、こう呼びかけました。

原爆を作る人々よ！
今こそ　ためらうことなく
手の中にある一切を放棄するのだ
そこに初めて　真の平和が生まれ
人間は人間として蘇ることが出来るのだ

核保有国と核の傘の下にいる国の指導者の皆さん。核兵器が存在するが故に、人類への脅威が一段と高まっている現実を直視し、核兵器廃絶に向け大きく舵を切るべきです。そのためにも被爆地を訪問し、被爆者の痛みと思いを一人の人間として、あなたの良心で受け止めてください。そしてどんなに険しくても、軍拡や威嚇を選ぶのではなく、対話と外交努力により平和的な解決への道を探ることを求めます。

唯一の戦争被爆国である日本の政府は、核兵器のない世界を真摯に追求する姿勢を示すべきです。そのためにも一日も早く、核兵器禁止条約に署名・批准することを求めます。そして、憲法の平和の理念を堅持するとともに、北東アジア非核兵器地帯構想など、緊迫度を増すこの地域の緊張緩和と軍縮に向け、リーダーシップを発揮することを求めます。

さらには、平均年齢が85歳を超えた被爆者への援護のさらなる充実と、未だ被爆者として認められていない被爆体験者の一刻も早い救済を強く要請します。

世界中の皆さん、私たちは、地球という大きな一つのまちに住む「地球市民」です。

想像してください。今、世界で起こっているような紛争が激化し、核戦争が勃発するとどうなるのでしょうか。人命はもちろんのこと、地球環境にも壊滅的な打撃を与え、人類は存亡の危機に晒されてしまいます。

だからこそ、核兵器廃絶は、国際社会が目指す持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）の前提ともいえる「人類が生き残るための絶対条件」なのです。

ここ長崎でも、核兵器のない世界に向けて、若い世代を中心とした長年の動きがさらに活発になっています。今年５月には、若者版ダボス会議と呼ばれる国際会議「ワン・ヤング・ワールド」の平和をテーマとした分科会が、初めて長崎で開催されました。

世界の若い世代が主役となって連帯し、行動する輪が各地で広がっています。それは、持続可能な平和な未来を築くための希望の光です。

平和をつくる人々よ！

一人ひとりは微力であっても、無力ではありません。

私たち地球市民が声を上げ、力を合わせれば、今の難局を乗り越えることができる。国境や宗教、人種、性別、世代などの違いを超えて知恵を出し合い、つながり合えば、私たちは思い描く未来を実現することができる。長崎は、そう強く信じています。

原子爆弾により亡くなられた方々に心から哀悼の誠を捧げます。

長崎は、平和をつくる力になろうとする地球市民との連帯のもと、他者を尊重し、信頼を育み、話し合いで解決しようとする「平和の文化」を世界中に広めます。そして、長崎を最後の被爆地にするために、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けてたゆむことなく行動し続けることをここに宣言します。

2024年（令和６年）８月９日

長崎市長　**鈴　木　史　朗**

平 和 へ の 誓 い

11時２分、止まったままの柱時計を見るたびに79年前の悪夢がよぎります。

当時10歳の私は、夏休み中で、午前中に警報が解除され、母と祖母は洗濯と炊事を始めていました。私は家にあったオルガンで、B29の爆音を真似して、ブーンブーンブーンと音を出して遊んでいました。それを聞いていた祖母が飛んできて「敵機が来たと間違われるから止めなさい。」と叱られ、渋々オルガンの蓋を閉めて立ち上がろうとした時、ピカッと眩しい閃光が走りました。とっさに学校で教わった通り、指で両耳・両目を押さえ、オルガンの前に伏せました。次の瞬間、爆風が家の中を吹き抜けるのが解りました。その間、恐怖に怯えながらじっと堪えていました。やがて静かになったので、恐る恐る頭を上げて辺りを見廻すと、惨憺（さんたん）たる有様で、太陽が落ちてきたと思いあ然としていると、洗濯していた母が狂ったように子供たちを捜し始めました。我が家は８人家族、幸いにも全員無傷でした。

数日かけて家の中を片付け、当時通っていた伊良林国民学校の事が気になり、友人と様子を見に行きました。目に入ったのは、「水を下さい、水を飲ませて下さい。」と弱り切った声で懇願している、男女の区別もつかないほど血だらけの人や上半身裸で傷を負った人でした。体育館に運び込まれた人たちは、誰かが手当てをしたり水を飲ませたりすることもなく、ただ寝かされているだけで、体育館の中は夏の暑さと漂う異臭で地獄のような状態でした。先程まで苦しさにわめいていた人が急に静かになったと思ったら、既に息絶えており、大人が頭と足を抱えて校庭に運び出し、穴を掘り、板の上に遺体を載せて焼いていきました。自分の学校が死体処理場に変わった光景は、今でも忘れることができません。

あれから79年、私たち被爆者は健康不安に怯えながら、核廃絶を訴えて来ました。しかしながら、海外に目を向けると、ウクライナやパレスチナなど戦火は収まるばかりか泥沼化しており、多くの子供たちが命を落としています。この悲しい現実を目の当たりにして、戦争の愚かさから目をそらすことは出来ません。平和の尊さを痛感する毎日です。

現在地球上には推定12,120発の核弾頭が存在すると言われており、世界においては核兵器の使用が示唆されるなど、一触即発の緊張が続いています。万一使用されるとこの地球がとんでもない状態になる可能性さえあります。本日ご列席の岸田内閣総理大臣へ申し上げます。子供や孫たちが安心して過ごせる青い地球を遺していくために、被爆国日本こそが、核廃絶を世界中の最重要課題として、真摯に向き合うことを願ってやみません。

私は、2015年から長崎平和推進協会の語り部として、長崎を訪れる修学旅行生や次世代を担う若者たちに核兵器の恐怖を語り続けており、2023年から英語による活動も始めました。平和とは何かを皆さんと一緒に考え、可能な限り続けてまいる所存です。最後に“peace is a world heritage shared by all humankind（平和は人類共有の世界遺産である）”と申し上げ、亡き御霊へ捧げる平和への誓いの言葉といたします。

2024年（令和６年）８月９日

被爆者代表　**三　瀬　清一朗**

※日本語訳は表紙裏面

Shinagawa Declaration of a Non-nuclear Peace Area

At the present time, on earth the human race has accumulated a nuclear arsenal quite sufficient to totally destroy itself.
No weapon has ever been developed which has not at sometime been put to use.
History bears witness to this terrifying truth.

We must lose no time in ridding the world of nuclear weapons.
Before the glaring flash fills the sky above our heads.
If we are too late, we will not even be left with a future to lament our failure.

With the heartfelt plea that nuclear weapons be abolished and permanent peace be established, Shinagawa City declares itself a Non-nuclear Peace Area and makes its appeal to the world.
We refuse to allow the manufacture, placement or introduction of nuclear weapons, by whatever country, for whatever reason.
To countries holding such weapons, we say, abandon your nu-clear armaments immediately!

For the future of this beautiful, irreplaceable earth and for all things living that exist upon it.

26th March 1985

Shinagawa City
Tokyo

２０２４　品川区平和使節　派遣レポート

発　行　令和７年３月
発行者　品川区区長室総務課
〒140-8715　東京都品川区広町２-１-36
電話　03-5742-6691
FAX　03-3774-6356
e-mail：somu-kokusai@city.shinagawa.tokyo.jp

令和6年品川区中学生
広島平和使節派遣